

二人の神風紡ぎし不世出の叙事譚

エリム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2035年、第三次世界大戦勃発。

当初核戦争となるかと思われたこの大戦は、中国が蘇らせた召喚術をきっかけに人類は決別したはずの古の災いとそれに対する影響を取り戻し始めた。

それから46年後―2081年。

新たな英雄となりえる者を守るため、二人の神風もその者と同じ学び舎の門をくぐった。

これは、本来語られることのない英雄譚―

「あゝ、授業ダリイ。これもあのクソ気に入らない奴のせいだろ。」

「間違っではないけど、とりあえず胸にしまっておこう？天音？」

二人の神風が紡ぐ叙事詩である。

とりあえず皆様初めまして。エリムです。

本作品は「こんな話を読みたいなく」という私の自己満小説です。

ですので、一人称と三人称があやふやなど。色々と至らない部分があると思います。そんな作品ですがやはり読者から何かしらの反応が欲しくなり、なろうとともにごちらでも投稿してみることにしました。

ですので感想や評価、誤字報告など気軽にしてもらえると嬉しいです。（あまり厳しいことを言われると落ち込みますが・・・）

では、もし趣味が合う方がいればよろしくお願いします。

R-15, 残酷な描写は念のためです。

※当作品はフィクションです。現実の地域、組織団体、個人などは一切関係ありません

※小説家になろう様にも重複投稿しています

目次

簡易設定（ネタバレ注意）	1
プロローグ	12
第一話	22
第二話	31
真説・第三次世界大戦とその後 第一章	36
第三話	41
第四話	55
第五話	63
第六話	78
第七話	90

簡易設定（ネタバレ注意）

人物編

紫乃宮 悠希（しのみや ゆうき） 性別：男 15歳

主人公

先天性の難病を抱えて生まれ、聖域治療を生後2日から受ける。

その結果、完治はしたものの幼期聖域治療患者の例に漏れず異様なまでの精神共感性と主に筋肉系の成長障害が発現した。

成長障害のため、15歳だが身長144センチ、体重42.7キログラムと小柄で身体能力も素は小学校高学年並。

両親、母方の祖母に愛されて育ったが両親は仕事上家を空けることが多く実質祖母に育てられる。小学2年の夏、運命とも言える『神帰教』による連続幼期聖域治療患者誘拐事件に巻き込まれ、連れ去られた先の研究所で天音と出会う。

一年半後、特危対応隊と警察の強襲捜査で生き残っていた他の実験者とともに救出され、その特異な状態から天音とともに情報庁預かりとなる。両親、祖母とは再会済み。

霊機 IR—L速開津比売

限定霊機状態 先が刃になっている特殊な十手

固有術式『人柱の禍祝』

藤堂 天音（とうどう あまね） 性別：女 15歳

メインヒロイン兼もう一人の主人公

4人兄妹の末で兄三人なため元々ボーイッシュな性格だったが、小学1年の秋に遠足の途中、人身売買業者に近くにいる同級生3人とともに誘拐された。この時から周りへの勇気づけと大人に対する反抗から粗暴な性格になっていた。

その後、『神帰教』に買われ研究所で比較実験の対象となっていた時、悠希に出会った。

悠希に対しては最初なよなよしいと思っていたが、悠希の優しさと精神共感性による心地良さからある種の母性と保護欲、独占欲から気付けばほぼ一緒にいる状態になっていた。

優秀な実験体として酷使されつつ、色々な意味で悠希を支えに生き延びていたが、ある日悠希が実験で半死半生に。これをきっかけに暴走する。

本来は殺処分され終わるはずだったが、天音にとっては幸運、神帰教にとっては不運なことにその日は強襲捜査が行われる日であったため生き延びた。

その際、研究所の施設を半壊させ多くの職員を殺傷している。

救出後は悠希とともに情報庁預かりとなり、今に至る。家族とは再会済み。

身長168.2センチ、体重体重57.1キロと女子にしては大柄。ショートカットのギリギリBカップで服装によつては男に間違われる。なお、悠希が好んで女装するため、男に間違われるのは逆にちょうどいいと思っている。

霊機 IR—L気吹戸主

限定霊機状態 仕込み刃の棍棒

固有術式 『震天狂舞』

葛葉 智晴（くずは ともはる） 性別：男 52歳

情報庁長官

悠希と天音の上司にして師匠。

相手の機敏を読んで、敢えて逆撫するような言動でペースを握るため、基本的に誰からも嫌われている。

本人は嫌われて当然と思っているため、あまり気にしてはいないが実は皆で楽しくしたいなとも思っている。それでも言動を改めない辺り筋金入り。(この辺り悠希にはバレている)

先代特危対応隊長でもあり、現役時代は『隙魔』と呼ばれ裏の世界で恐れられていた。

霊機 IR-S12クロノス

限定霊機状態 短刀

固有術式 『流隙』

八泉 幸三(やいずみ こうぞう) 性別：男 46歳

日本国防軍機動防衛総隊第二大隊長。

実働部隊からの叩き上げで、部下からの信頼も厚い。本人も部下を大事にしており、彼の下での戦死者は非常に少人数。

キャリアアップとして情報庁に出向していたことがあり、情報庁内部について他の人間よりは詳しい。戦闘能力と直感力は高いが論理的に作戦を指揮するのが苦手なため、七田中尉に副官として助言してもらっている。

霊機 DM-22屠竜

限定霊機状態 銃剣付アサルトライフル

固有術式 なし

七田 恵(しちだ めぐみ) 性別：女 28歳

八泉の副官

純参謀型の国防軍人で、元々は国防陸軍幕僚監部付だったのを当時の上官の紹介で八泉と出会い、キャリアアップとして八泉のもとへと異動した。

八泉の直感にはよく驚かされている。

霊機 なし

限定霊機状態 なし

固有術式 なし

山西 亘(やまにし わたる) 性別：男 36歳

日本国防軍機動防衛総隊第二大隊総魔導部隊長
優秀ではあるが、状況が切迫すると感情に流されやすくなる。

霊機 DM-22A屠竜改

限定霊機状態 アサルトライフル

固有術式 なし

天城 快人（あまぎ かいと）

悠希と天音の護衛対象

それなりに裕福な家の生まれで、天音曰く「人生イージーモードの勝ち組」

異世界に召喚されれば王道勇者を地でいきそう

同年齢の義理の妹がいる

限定霊機状態 クレイモア

固有術式 『未完の叡智・踏襲見識』

天城 瑞希（あまぎ みずき）

天城 快人の義妹

快人のことが好きで、なんだかんだ理由をつけて快人とともに仁徳学園に入学したのも快人と離れたくなかったから。

秀才タイプ

限定霊機状態 ボウガン

固有術式 なし

伊樹島 凜（いきしま りん）

原初の魔導師、英雄と呼ばれる伊樹島 晃一郎の孫娘

伊樹島の名に恥じないように努力できる天才。

しかし、既に成功している両親や親せきにコンプレックスも抱いている

本人に自覚はないが、自らと今までの経験を基準にしているため他者を見下した言動をしがち

チヨロイン

限定霊機状態 日本刀

固有術式 未発現

五月女 悠一郎（そおとめ ゆういちろう）

実戦剣術『五月女流』を伝える家の子息。門下生には警察や国防軍関係者も多い

自他共に厳しいが決して堅物というわけではなく、リーダーではないが集団の要石のような存在になりやすい副リーダータイプ

限定霊機状態 日本刀

固有術式 なし

水流 セリナ（つる セリナ）

蒼穹戦舞の世界ランク3位のライアン・水流と女子世界ランク5位の水流 朱里の一人娘

魔導技術系に関してならまさしく天才だが、どこか抜けているところがある

限定霊機状態 サブマシンガン

固有術式 なし

明嵐 高洋（めあらし こうよう）

日本で乙種霊機のシエラ第二位を誇る明嵐工業の創業者一族本家の一人

自己紹介時は緘黙そうだったが、それは緊張していたためで実際はノリのいい性格

限定霊機状態 ガンブレード

固有術式 『武具王の庭』

山葵 礼華（わさび れいか）

姉が第一大隊の副隊長

別口の護衛というわけではないが、徐々に学校と国防軍間のメッセンジャーのような役割になっていく。

戦闘スタイルは生存性特化で攻撃力はあまりないが、防御力は高い

限定霊機状態 拳銃

固有術式 なし

風師 沙夜（かざし さや）

入学式の前に悠希と天音が出会ったペアの一人

オカン気質だが年相応なところもある

オカン気質なのは香織が言うまで忘れていたが、「やらないで後悔

するよりやって後悔すること。代わりにさーちゃんが色々考えて私をフォローすること」という約束が基になっている

悠希と天音による魔改造被害者その1

限定霊機状態 仕込み杖

固有術式 なし

氷室 香織（ひむろ かおり）

入学式の前に悠希と天音が出会ったペアの一人

明るい元気っ娘だが、勘が鋭い。基本的に樂觀的だが謎のパニック障害を患っており、不意に情緒不安定になる。

幼少期は今は180度違いオドオドとして、誰かの後ろにいるような性格だったが、ある時沙夜から理由を聞かれ自らの不安を伝えその後「やらないで後悔するよりやって後悔すること。代わりにさーちゃんが色々考えて私をフォローすること」という約束をし、今の性格になる

悠希と天音による魔改造被害者その2

限定霊機状態 短刀

固有術式 なし

荒木 巴（あらき ともえ）

仁徳学園1-D担任

機動防衛総隊第一大隊OG

現在彼氏募集中だが、少なくとも今後3年間は忙しさからそれは難しくなる

限定霊機状態 アサルトライフル

固有術式 なし

用語編

日本国防軍

第三次世界大戦後に自衛隊から改編された日本の正規軍。

国防空軍、国防海軍、国防陸軍、監査隊、機動防衛総隊の5軍とそ

他の付属機関で構成されている。

陸軍、海軍、空軍

基本的に各自衛隊の拡大発展と思ってもらって問題ない。

基本任務は国外勢力の脅威からの防衛。

監査隊

簡単に言えば憲兵隊

機動防衛総隊

3軍が国外勢力からの防衛ならば、機動防衛総隊は災害からの防衛。要は災害派遣専門部隊。こう聞くと後方部隊の総括のようにも感じるが、異獣襲来という災害のためバリバリの実戦部隊郡。

基本装備は陸軍の物と同じ（ただし数は少ない）だが、多用途艦というモジュール艦を2隻保有している。必要に応じて各軍を要請という形で動かすことができる、ある意味最強の部隊。

全13大隊で構成され、第二から第十三大隊が各地方を担当し第一大隊は遊撃、応援部隊という位置付け。

プロローグ時、第一大隊は災害派遣を終え帰投中であつたため魔導師部隊が2個小隊派遣されただけだった。（本来はそれでも充分）

魔導師の数は国防軍の中で一番多い。

情報庁

書類上は防衛省隷下の組織だが、立ち上げの際様々な組織が合併したため管轄がややこしくなり事実上の独立官庁。

基本任務は国内外の情報の収集・分析（要はスパイ）

そのために様々な出先機関がある。

その全貌を知っているのは情報庁だけと言われるほど秘匿性が高い。

特危対応隊

情報庁の中の部署の一つにして実力行使部隊の一つ。テロリストを始め非正規勢力を相手取る部隊であるが、相対する相手に固有術式持ちや甲種霊機が存在する事が往々にしてあるため、構成員は下手な魔導師部隊よりも強い。

そのため、戦闘の応援戦力などに出勤することもあり、逆転を届ける存在『神風』として畏敬と畏怖を集め、都市伝説化している。

悠希と天音は現在ここに外部委託員として所属している。

霊機

現代の魔法使いの杖であり、パワードスーツ。

甲種、乙種、丙種がある。

甲種は初期に開発された種類であり実際の半サイボーグ。しかし、性能は一番高く更にほぼ確実に固有術式を発現するため、特殊部隊やテロリストに多い。

乙種は現行もつとも普及したタイプであり、ウエットスーツ状の補助スーツとヘッドセット、腕輪で構成される。適正のある者でないといけない甲種と違い、誰でも扱えることをコンセプトとしている。しかし、誰でも扱える代わりに固有術式を発現することはほとんどなく、人によっては劣化量産型とも言われる。

丙種は完成された霊機を目標に、各国で開発されているものであり、現在試作型が存在しているのみ。

コンセプトとしては誰でも扱え、今までのデータなどから術式のエッセンスを合成し、固有術式のようなオンリーワンの術式の魔法陣を構成するというものが多い。

限定霊機

完全に霊殻による装甲や武装を展開せず、魔法使いの杖としての機能のみを使用する状態。この場合パワードスーツ機能はないため、個人が望む武装ではなく設定されたものが展開される。

また、術式にも一部制限がかかる。

競技などではこちらが利用されることが多い。

魔導師

霊機を扱い、魔術を使う者の総称。

霊殻

魔力が物質化したもの。一部異獣で確認されており甲種霊機で観測可能に。

そのデータから乙種以降において装甲や武装を展開することが可能になった。

現在は甲種でも可能。

硬度は一部の例外を除き、タンングステン合金並には通常ある。

銃などを設定すれば、理論上いつでも無限に発砲できるため銃産業と警察関係に激震が走った。

現在は霊機の展開と設定が厳しく規制されているのと、銃産業の方は霊機用の武装設定データを開発することでなんとかなっている。

魔力限界

乙種、丙種に見られる現象。

本来扱えないものを使用している以上、負荷があるのは当然のこと
で、それに耐えられなくなった状態。

この状態になるととてもない疲労と倦怠感に見舞われ、人によつてはその場で気絶してしまうこともある。

一応この状態でも霊機の使用は可能だが、まずまともに扱えず仮に扱えたとしてもそれは命を削っていると同義である。

魔術

古より伝わりし、奇跡を起こす術。

どうしてその様なことが可能なのかは現在研究中だが、術を使うのに必要な魔法陣が文の役割、魔力がインクの役割を持つており世界を一時的に書き換えていると考えられている。

実際研究初期から魔法陣を文とした場合の文字または単語と推測されるものは発見されており、新たな術式が現在も開発されている。

固有術式

読んで字のごとく、特定個人にしか使用できない術式。

特徴として魔法陣化できないことが挙げられる。

使用者そのものが魔法陣なのではないかという説もある。

魔力

人工魔力と錬成魔力がある。

人工魔力は世界に流れる生命が無意識に発した魔力を集めたもので極彩色の魔力とも呼ばれる。生命がある限り無尽蔵ではあるが、所詮元々が様々な別の魔力のため、侵食が多発し効率が悪くまともな出力を得ようとするとそれなりに大がかりなものが必要になる。

錬成魔力は魔導師が生成した魔力で他の魔力と触れない限り侵食もないため効率は良いが、基本本人にしか扱えない。

侵食

異なる魔力がふれあうと、魔力が霧散する現象。

既に術として外殻を持つている、目的が統一されている、近親者である、誘導し受け流すなどである程度は抑えられる。

異獣に対して魔術や霊殻が有効な理由は、魔力障壁をこの現象で弱くする、または突き抜けるから。

異獣

この世界に重なるように存在するもう一つの世界に棲む生き物の総称。

人類が遥か昔に決別したはずの災い。

姿形は神話や伝承などに出てくる怪物で、実際にそれらに描かれた怪物そのものである。

異獣全てが魔力障壁を展開でき、一部の異獣は魔術を行使する。

魔力障壁が一番弱いものでも、純粋な物理的攻撃で破ろうとするなら76ミリ砲クラスは必要。

霊機を始め魔術を使用した攻撃が広まったのは、本来中国が召喚する異獣に対抗するためだった。ちなみに、頭文字にMが付いた兵器は、基本魔術利用兵器である。

現在は大戦末期に大型召喚儀式中に、日本の制作した新型魔術利用型戦略弾頭兵器をアメリカが使用し攻撃した結果、こちらとあちらのずれが少なくなったのか様々なところから勝手に出現し人を襲う。

聖域治療

24時間治療魔術をかけ続けつつ、高魔力空間で行う治療。

大体の病気や怪我を患者への負担を極限まで低くして治療できるため、体力の低い老人や救急患者、末期患者の治療に極めて有用。

しかし、患者が若年であればあるほど治療後に何かしらの異常が発生しやすい。

統計上14歳以上に発生したことが無いが日本では念のため16歳以下に聖域治療を行う場合、患者または患者の保護者への説明と同意が求められる。

このため法律上は16歳以下だが、医学的には13歳以下の聖域治

療を受けた患者を幼期聖域治療患者と呼び、注意を払っている。

この現象の原因ははつきりとしていないが、一説にはまだ身体の定まっていない状態で人工高魔力と魔術を受け続けた結果、ある種の進化をしているのではないかと言われている。

神帰教

異獣が無秩序に現れるようになって出現した新興宗教。

このまま世界は神代へと回帰し、人と神が共にある世界へ生まれ変わるという教義を持つ。パツと見なら多少まともな教義に見えるが、実態は新しい世界で必要だと非合法な魔術実験を行い、新たなる世界に生まれ変わるには古き時代は消えねばならないと破壊活動を行う世界的に危険視される国際テロリスト集団である

エルフ

幼期聖域治療患者で異常を発現した者たちの俗称

超直感

異能系の異能の一つで、感覚的な未来予知を行える

異能

魔術とは違う別のナニカ

研究はそれなりにされているが一般の認知度は低い

魔力の多い環境では活性化することが確認されており、少なくとも魔力と関係があることがほぼ確実視されている

異能系と増強系に分類分けされる

プロローグ

それはまさしく当事者とそうでない者との感想が一変する光景だった。

そうでない者にとっては華やかで格好いい、男ならばだれしも、いや女子でも一度は憧れるだろう現代の英雄譚。

巨大で恐ろしい竜の姿をした化け物に対し、最先端技術と古の叡智を会わせし鎧と武具―霊機―で立ち向かう者たち。

化け物が少し遠くに位置する、軍艦の砲だと言われれば信じてしまうほど巨大な銃身のライフルを持つ者や、自らを中心に複数の魔法陣を立体的に噛み合わせ巨大な魔法陣を作りあげている者、それより更に後方の戦車や対戦車ミサイルなどをまとめて邪魔だとばかりに火を噴けば、その射線中に一瞬光の壁が現れ彼らを焼くはずだった業火はあらぬ方向へ向かい、お返しとばかりに火砲にミサイル、巨大な槍の形をした光や氷塊が化け物を容赦なく襲う。

そのような攻撃を化け物は先ほど現れたのと似た光の壁で防ごうとするが、その光の壁は耐えきれなかったらしくいくつかの攻撃が着弾。化け物が衝撃でもんどりを打ったその隙を逃さんとばかりに、プレスの前に空へと退避していた剣や槍などの武具を持った者たちが一斉に攻め立てる。

彼らの持つ武具は振るえば突風が吹きすさび、斬りつければその斬線をなぞるように燃えあがるなど、見る者を「このまま簡単に化け物を倒してしまえるだろう」と根拠もなく錯覚させてしまうほど派手で華々しい戦闘風景。

攻め立てられる化け物は鋭い爪を横薙ぎに振り払い、翼を羽ばたかせて飛び上がろうとする。

横薙ぎの爪と羽ばたきによる突風で、攻撃していた彼らもそのほとんどは自主的あるいは強制的に距離を取らされ何人かは地面に叩きつけられていた。

しかし、化け物の足が地を離れようとしたその瞬間。

足元に魔法陣が浮かび上がり、まるで足と地面が接着されているよ

うに地面から離れることはなくバランスを崩してしまふ。

そこへ大きな光が降り注ぎ、爆発音とともに立ち上った粉塵に辺り一面が包まれた。

それをテレビや携帯端末などで見ている者たちは大人は彼らに武運があることを祈ったり、戦い方を寸評するなどし、子どもは純粹に化け物を退治している彼らを感謝と憧れを持って応援していた。

一方、当事者にとってその場は地獄と言って間違いなかった。

〔今のプレスの防御で5五人が魔力限界に達しました！〕

「地面に叩きつけられてた者の内二名が戦闘続行不能。撤退補助のためもう二名戦線を離脱します。」

「弾を打ち尽くした車両は補給へ下がれ！弾がなければ何も始まらない！」

「魔力限界で抜けたやつのはこつちから回す。陣地防御の本職には劣るが無いよりマシだろう。」

〔助かります！〕

「9号車、13号車はポイント38へ。負傷者、魔力限界者と合流し、ともに撤退してください。」

「現在、支援攻撃のため『あまぎ』より発艦したMF-3八機が15分後、続いて百里より対大型異獣兵装のMP/B-7二機が約23分後に現戦闘地域に到達予定です。」

作戦指揮所であるこの部屋をそこかしこを飛び交う、現場の通信にオペレーターによる指示や報告。

それらを聞いている日本国防軍機動防衛総隊第二大隊長、八泉幸三大佐はその全てを聞き分けられてしまうことに「聖徳太子もこのような感覚だったのかな」と今はそのような状況ではないと分かっているのもついで、そう考えてしまった。

「ゴホン」

そんな八泉大佐の考えを敏感に察知したのか、隣に立つ副官にして参謀の一人でもある七田 恵中尉から咳とともにジト目を向けられた。

八泉は若干居心地の悪さを感じつつ、現在の状況を自分の中で纏め、その結果今後どのような状況になるかを予想していく。

「七田中尉」

「はい」

「今回の迎撃作戦、君から見てこのまままで成功すると思うかね？」
形は問いかけだが八泉の中では既に答えは出ていた。

しかし、現場での実績とカリスマ性で今の地位にいてと言ってもいい八泉にとって現場のカンである自分の考えと、論理的な七田の意見はある意味答え合わせとして今回も尋ねていた。

「率直に言って厳しいでしょう。」

それは八泉と同じ答えであり、八泉は「やはりか」と顔をしかめた。

「一応尋ねるが、理由は？」

「いくつか挙げられますが、一番は目標の鱗の防御力の高さですね。」

「だろうな。」

これも八泉と同意見だ。

「ちなみに、我らの現戦力で目標を殲滅できる可能性は？」

「百里が間に合えば不可能ではありませんが、その前に前線が崩壊する確率が高いかと。」

「分かった。」

その言葉を聞いて八泉は数瞬目を閉じたあと、徐にオペレーターへ「総魔導部隊長、山西少佐に繋いでくれ」と命じた。

「山西少佐との通信、開きます。」

「・・・？」

八泉の行動が理解できないのか、七田中尉は訝しげにしながらもとりあえず自分が口を出すべきではないだろうと沈黙しているようだった。

「八泉隊長、何でしょうか？」

通信から聞こえる山西少佐の声には若干の不満が聞いて取れた。おそらく前線維持の忙しさからだろう。

「そちらも大変だろうから簡潔に言おう。山西少佐、正直に言っ

航空支援まで前線を持たせられるか？ああ、ここで精神論は挟まないでくれよ？」

これは確認だ。八泉とおそらく七田も同じ見解であろう、この状況の。

「・・・あまぎ」からの支援まではなんとかなるでしょう。しかし、それで目標にどれだけの損害を与えられるかで状況が変わります。今回の異獣で厄介なのは魔核が体内深くにあることに加え、体表の鱗の硬度と柔軟性が高いレベルで備わっている点です。先ほどの攻撃も鱗に阻まれ、実際のところあまり効果はありませんでした。百里の貫通爆撃ならばとは思いますが、艦載機の支援は正直無いよりはマシというレベルの可能性が高いです。そしてそこから百里の支援まで楽観的に見て5分といったところですが、近接組が耐えられない可能性が高いです。そうなるかあとはズルズルと・・・」

やはり現場も同じ結論に至ったらしく、尻すぼみになっていったので八泉がセリフを引き継ぐ。

「前線が崩壊し、目標を自由にしてしまうか。」

そうなってしまうと迎撃作戦は失敗。異獣がどのような行動を取るかわからない。

太平洋に出てくれるなら良いが、東京をはじめ都市部に移動されては目も当てられない。

「・・・わかった。では大隊長として命じる。本作戰参加の近接魔導部隊全ては『あまぎ』艦載機の航空支援に乗じて後退、拘束・観測部隊の援護に回れ。」

「隊長っ!？」

「なっ！それでは防御部隊の負担が！」

流石に黙っていられたなかったらしく七田中尉も「何を考えているんですか!？」と言わんばかりの形相をしているし、山西少佐は「何をバカな」といった様子だ。作戦指揮所内も少し騒がしくなったように感じる。

だが、八泉はそれらを一切無視してただ一言こう告げた。

「『神風』を呼ぶ」

と。

『神風』

その言葉を八泉が出した瞬間、人間だけが一瞬時が止まったかのよう
に物音以外の音が消えた。

その光景を見た八泉は苦笑いをこぼしつつ、「納得したかね?」

と画面の向こう側と隣に向けて声をかけた。

「ッ申し訳ありませんでした。しかし、あれは都市伝説や戦場伝説
の類いでは?」

山西少佐は直ぐに復帰したが、なおも半信半疑なようで食い下がっ
てくる。

「ん?君は彼らにあったことがないのか。なら、この後嫌でも知る
ことになるだろう。彼らについての噂には、誇張は多少有ってもうそ
はないということにね?」

そして八泉は「何か異存はあるかね?」と締めくくった。

その顔には「これで話しは終わりだ」という意志がありありと浮か
んでいた。

「・・・解しました。全近接部隊は『あまぎ』艦載機の航空支援に
乗じて後退。拘束・観測部隊の援護に回します。しかし、防御部隊の
方にも少し不安があるため一部を回したいのですがよろしいでしょ
うか。」

山西少佐は渋々だが納得したようだ。意見具申については七田中
尉に目を向けると「問題ないかと。」と小さく返してきたので

「構わない。その辺りの裁量は山西少佐、君に任せる。」

とその意見を了承した。

「ありがとうございます。それでは。」

「ああ」

通信を終えた八泉は椅子に深く腰掛け、「ふう」と息を溢した。

「・・・まさか、『神風』を使うとは。確かにそれなら万に一つの失
敗もまずないでしょう。」

七田中尉は独り言のように八泉へ話す。本来は注意しなくてはは
いけないが、まあいいだろうと八泉は無言で先を促した。

「しかし、彼らに関しては同じ防衛省の下部組織とは言え指揮系統からして違います。正直なところ、私も半信半疑なのですが……。」

「まあ、確かに不安に感じるのも解るが……。」

日本国情報庁特危対応隊、通称『神風』は一般には情報が公開されておらず、各省庁を始めとした各種政府機関の一定以上の立場の人間でないとその情報に触れることもできず、また、『神風』に関する完全な情報を持っているのは情報庁だけだと言われている。

ただ、その任務の関係上、防衛省、警察、検察庁、国防軍にはそれなりに噂としてその存在が広がっており、こうして話すことがてきるのだ。

「確かに組織の構造上、多少の軋轢はあるが前から「何か手伝うことがあるなら手を貸す。」と向こうがと言っているし、ウチの方もあまりいい顔はされないがそれを除けば特に問題はない。」

国防軍としては「自分たちの面子は確かに大事だが、国民の生命と財産、隊員の命の方がそれより大事」という感じなのだろう。

「しかし、個人的に情報庁の長官とは知り合いだが、あまり好きではないな。」

「何故ですか？」

「人からイラつかれる、ウザがられることをわざとやるからな。」

八泉の脳裏には出向という形でしばらくいた、情報庁時代がちらついてくる。

「ヤな人ですね。」

と七田中尉が相づちを打つので「だろう？」と八泉は返した。

「情報庁の情報収能力は高い。特にこういった緊急時の諜報活動は凄まじいからな。大方、この会話もあちらには筒抜けで既に準備されているだろうな。」

内部協力者などを使ったヒューミントにはじまり、機械式の盗聴盗撮に通信の傍受や端末のハッキング、式神による潜入などなど、聞いた時は仮にも同じ国を守る仲間なのにそこまでやるのか。と八泉は呆れと憤慨で思わず呟いてしまったのを覚えている。

もつとも、その呟きも当時教育担当だったあの男にはしつかり聞こ

えていたらしく、後日の研修訓練で組織がどのように弱くなるかを実際に叩き込まれたうえに「貴方は少々善良すぎます。多くの人は貴方のようではないんですよ。」と言葉は心配しているが顔はニヤニヤ笑っていて完全にバカにした煽りをうけたが。

「たがしかし、なあ。」

とはいえ、いくら向こうが問題はなかりうと頼み事をする以上、内心は嫌だとしても此方から連絡するのが筋だろうと八泉は備え付けの通話機に手を伸ばそうとしたその時、「ピリリリ」と通話機が着信を知らせた。

このタイミングで連絡してくる相手など八泉には一人しか浮かばず、七田中尉も今までの話しかから察したのか苦笑している。

気を抜かれた八泉は

「な？あの人の嫌らしさがわかるだろ。」

と深いため息とともに小さく愚痴りながら着信を取った。

「とということでも今回の任務は大型異獣の5〜10分ほどの足止めと、もしも貫通爆撃でも殲滅し損ねた場合の止め役だね。」

気楽そうに言ってくる上司の言葉を聞いて悠希は思わずため息をついた。見れば隣にいる天音も「うわあ」と言わんばかりの顔だ。

「うわあ」

「いや、言うのかよ」

思わず突っ込んだ僕に対し「いや、つい自然に出てしまったな！ほら分かるだろ！」とあたふたと弁解する相棒。どうやら突っ込んだことが怒っていると勘違いしているらしい。

「別にそんなあたふたしなくてもいいでしょ。どうしたの？」

「そ、そうか？その、なんだ。さっきの声音が寒々しかったから、昨日ユウのケーキ間違えて食べてしまったのをまだ怒ってるのかと思っさ。なんかユウ、朝から不機嫌だし。」

なるほど。もう気にしてないつもりだったけど、どうやら無意識に態度に出していたらしい。ただ、理由を聞いてムカムカが蘇ってきたが。

「ごめん。聞いてまたムカムカしてきた。」

お風呂上がりの楽しみにしてたのに。

「げっ、やぶ蛇だったか。」

「ホントに済まなかったってー」とすり寄ってくる天音をハイハイとあしらいつつ「まあそれより」と話を戻す。まあケーキに関してはこの任務のあとにベリーフラワーのフルーツミルクレープで許してあげよう。

「長官の人の悪さもう少し抑えた方が良くと僕は思いますよ?。」

今回の概要を聞いて分かりきってはいたが、それでも改めて長官の人の悪さを思い知る。

「確かになー。今回だって聞いてる限りじゃ分かっててタイミングあわせただらろ?。」

じゃれあいモードから復帰した相棒も同意してくれるらしい。

まあ、ウチにいてこの感想を長官に持たないのは本人だけだろうが。

「狙ったのは事実ですが、そもそももつと早くあちらが要請してくればこんな尻拭いの様なことには成らなかつたのです。」

「意趣返しですよ。」などと云っているが向こうからすればその指揮官に取っては嫌な相手に頭を下げさせても貰えず更に嫌な思い出をほじくりかえされ、現場の特に魔導師には僕たちが美味しいところだけを持って行ったと感じるだろう。

そしてこの長官はそれもわかつた上でやっているので質が悪い。

この相手を不快にさせる言動は現役時代に仕込まれたと本人は言っているが、それを信じている者は誰もいない。

「さて、話が幾度か脱線しましたがリラックスタイムはそろそろ終了です。時間的猶予もそんなにありませんからね。」

パンパンと手を叩いて長官が雰囲気切り替えた。それとともに自分たちも意識を切り替える。安寧に漂う影法師から、災いを吹き祓う神風へと。

「任務内容は先の通り、情報の秘匿は国防軍がやってくれるそうなので今回は気にしなくていいです。」

その言葉を聞いて天音が嬉しそうに微笑む。

天音はそういうのは僕以上に苦手だから、なにも考えずに済む！と喜んでいるんだろう。

なので

「脳筋ごり押しはダメだからね。」

釘を刺しておく。

でないと、天音は防御すら考えず突撃するバーサーカープレイを嬉々としてやるので僕が大変なのだ。

普通に戦いなさい。普通に。

「ちえっ。わかったよ。けどさ？少しぐ「リラックスタイムは終わりと言いましたよね？」すみません。」

長官に怒られてシユンとする天音可愛いな。

と、ダメダメ。お仕事お仕事。

「禁則事項、現場裁量についてはレベルBとします。では紫乃崎特位、藤堂特位、現時刻を以て本任務の発令を日本国情報庁長官として宣言します。音声コード入力。『我ら三界をわたる神風纏い』」

「『災いの憂い吹き祓わん』」

長官の承認コードに応じて僕たちも受領コードを返す。

このコードのやり取りとともに長官との通信は終わり、僕たちには霊機が最・初・か・ら・纏・つ・て・い・た・か・の・よ・う・に・顕れていた。

「ん、完全展開による機構部及び霊殻部ともに異常無し。ユウは？」
「同じく異常無し。国防軍の戦術ネットワークとの接続も完了。同期するね。」

だが、お互い慣れたもので直ぐに霊機のチェックと、戦場への介入準備を完了する。

「よっしや、ほんじゃまあ、一丁」

天音が少しワクワクしたように呟く中、背部翼型スラスターが唸りはじめ足元に魔法陣が顕れる。

「派手にやりますかねっ！」

その叫びともにスラスターが思いつきり噴かされ、少し赤く成りは

じめた空へと飛び出していく。

「最近、面倒なのばかりだったからっ」

それにつき僕もスラスタ―にエネルギーを回しながら滑空術式を展開、

「ね！」

天音の後を追い、空へと飛び出した。

第一話

♪

「……ん、」

携帯の目覚ましを止め、天気の確認に窓を見る。

今日も天気は晴れ。窓から差し込んでくる陽光は少し儂げながらも暖かく、そこまで太陽は好きではない僕でも、朝の春の陽気は良いものだと感じる。

主に夏みたいなの刺すような刺々しい日差しと違い、柔らかく包み込むような羽毛布団のような日差し。

ある程度日が昇ってしまえば全てを暴くように空を照らすクセに、なんで明け方はこんないつまでも浴びていたいと思えるような優しい光なんだろうか。

「……さて、朝ごはんを作りますかね。」

曙光をそれなりに堪能し、布団から出る。出ます。出たいのですが、あのく天音さん？そんながつつりと右腕を抱き締めないでもらえます？地味に痺れてるんですが。

「ZZZZ……うへへ……ユキ……美味そう……」

いや、それ以前にどんな夢見てるの!?

このまま腕を離してくれそうもないし、抜こうと引っ張ると逆にもっと抱き締めてくる。

ああもう！ご飯出来てから起こそうと思ったけどいいや。ちよつと早いけど起こしてしまえ！

「天音！朝だよ！起きないと朝ごはん無しにするよ！」

できるだけ耳元で大声を出しつつ、足は自由だったので蹴りつける。

一見ひどい絵面だが、こうでもしないと天音の拘束が緩むことすらまずない。

どうせ大したダメージではないのだし。

そうして格闘すること約3分。布団はもみくちゃになり、いい加減疲れ始め喉も痛くなってきて「もう朝ごはんはゼリー飲料でいいかな

？」と諦めかけた時にやっと天音はごそごそし始め右腕の拘束を解いてくれた。

「うんく後15分・・・」

「別に構わないけど、疲れたからもう起こさないよ？いいの？後から文句言わない？」

「んく起きる」

疲れたけど、こうして寝ぼけた天音を見るのは正直嫌じゃない。普段の少し粗暴だけどカッコいい天音も好きだが、こうして普通の女の子っぽいところもギャップ萌えする。

言うど恥ずかしがるから弄る時にしか言わないけど。

ただもう少し寝起きが良くなってくれないかな。

「おはよーさん。ユキ」

と、気付けばきちんと目が覚めたのか伸びをしながら天音が挨拶してきた。

「おはよう天音。とりあえず僕は朝ごはんの支度をするから、先にシャワー浴びてきたら？」

「ん？そうか。わかった・・・ってユキ！まだ6時過ぎじゃねーか！時計を見て天音は起こすのが早すぎる！と怒りはじめたが、そんな言い分が通るか。

「天音が僕の右腕を離してくれなかったんだから、仕方ないでしょ。ほら、僕の右腕と天音の腕、どっちもそんな感じで赤くなってるでしょ。まあ、たまには早起きは三文の得だと思って。」

ムツとしつつ、自分の腕と僕の右腕を見比べた天音は苦い顔になった。

「俺は三文より少しでも惰眠を貪りたいってーの。まあ布団の惨状と腕の跡から見てその通りなんだろうな。自業自得か・・・すまん、ユキ。」

まあ、こんなことはよくあることなのでこっちは気にしてない。というより、熱くなりやすく冷めやすい天音と過ごす上でこんな気にしていたらどうにもならない。

「わかったらほら。シャワーを浴びに行くなり布団片付けるなりし

て。朝ごはん要らないの？」

「本当にごめんな。」

と布団を片付け始める天音。

全く朝っぱらから。

さて、気を取り直してごはんごはん。

「えーと、卵にキュウリの塩揉み、ベーコン、ウインナー、牛乳か」
台所にて冷蔵庫を確認するが、当たり前だが思った通りの品物しか
入っていない。

今日、買い物に行く予定だったから仕方ないけど少ない。

ん〜これで作るものか・・・とそうだ！前に買ったフランスパンが
こつちに・・・とあったあった。よし、メープルシロップも残ってる。

「フレンチトーストに焼いたベーコンとソーセージ、あとはインス
タントのコーンポタージュにキュウリの塩揉み、よし。野菜が少ない
けど、フレンチトーストに味噌汁は違うだろうしこれでいこう。」

まずボールに卵、牛乳、砂糖を入れて混ぜ、卵液をつくる。

どうせ食べる時にメープルシロップをかけるから砂糖は少なめに
入れてと。

ちよつと味見、よし。

フランスパンを切り、パットで卵液に浸しておく。

ほんとはパットで卵液を作った方が効率良いんだけど、うちのパッ
トそこが浅いからこぼれるんだよな。

もう使わないからボールは洗って片して、次はソーセージどベーコ
ンを炒めるんだけど・・・

「天音〜？ウインナーは切った方がい〜い？それともそのまま炒め
る〜？」

「できればタコだと嬉しいんだが〜」

「りよーかーい。布団片したらシャワー浴びてきー」

「ちようど終わったから浴びてくるわー。そういうユキはー？」

「食べてから浴びるー。」

「えー！一緒に浴びようぜー！」

「バカ言っていないで早く浴びてきなさい。今日手があまりかからないから、すぐできるよ！」

寢室の天音に伺いをたてると、なぜかシャワー混浴に誘われた。一応未婚の男女なんだからやめなさい。

「つまんねーの」と風呂場に向かう天音を横目に見つつ、タコさんウインナーの作業にかかる。

とりあえずウインナー6本の12匹でいいか。ベーコンもあるし。半分に切って足状にするため、縦に十字に二回切れ込みを入れる。言葉にするとこれだけだが、主に二回目の十字切り込みが難しい。

二匹ほど失敗しかけたがなんとか全て作り終え、ベーコンは三等分にする。

油を薄く引いたフライパンとヤカンを火にかけ、ウインナーとベーコンを一緒に炒めていく。

しばらくすると、パチパチという音ともになんともジャンキーで食欲をそそる匂いがたちのぼり、タコの足が開き、ベーコンにも少しの焦げ目がついたところで火から下ろし、皿に盛り付けよし一品完成！お湯が沸くまでテーブルのセッティングをし、それが終わればフレンチトーストを焼いていく。

「ユキ、上がったぞー」

残り4枚のところはどうやら天音がシャワーから上がったらしい。「もうすぐこっちも終わるから、テレビでも見て待っててー」

「ほいよー」

「――では、次のニュースです。昨日、北茨木市にて行われた異獣殲滅に関して防衛省は」

その返事とともに、テレビからは朝のニュースが流れ始めた。ん、表面はもうそろそろいい感じかな？

『確かに強力な異獣でしたが、我々の責務を果たしただけのことです。これからも国民の皆様の期待に沿えるよう、各員一層奮励努力していきます。』今回の異獣殲滅の指揮官だった八泉幸三大佐は記者からの質問に対しこのように答え、この謙虚な姿勢にネット上では大き

な反響を呼んでいるようです。」

「おーおー、人気者は辛いねえ。」

最後のフレンチトーストが焼き上がり、テーブルに向かうと天音がニュースに対してぼやいていた。

「天音、出来たよ。」

天音に一言声をかけ、僕は自分の座布団に座りお互いのコップにオレンジジュースを注いでいく。

「お、今日はフレンチトーストかあ。へへっ」

天音もテレビからテーブルに向き直り、少し顔をニヤけさせながらに座り心地を整えている。

「いつもありがとな。」

「何をやぶからぼうに。」

「いや、なんとなく。」

「そうね。んじゃ食べようか。」

「そやね」

「いただきます。」

「ユキ、今日は何時顔を出しに行くんだっけ？」

「ご飯を半分ほど食べた終えた時、天音はそういえばという感じで今日の出頭時間を訪ねてきた。」

あれ？そういえば僕も時間を聞いた覚えがない。

「ちよつと待って。今確認してみる。リンドウ？聞いてたでしよ？」

『本体に照合。該当事項無し。長官殿のミスかそれとも何時でも良いのか。とりあえず0930に出頭面会のスケジュールをぶちこもうと考えるが、ご両人はそれで宜しいか？』

「僕は大丈夫。」

「俺も別に。」

答えてくれたのは情報統合管理システム『竜胆』、その音声端末だ。僕たちが住んでいるのは情報庁の所有するセーフハウスの一つなので、盗聴機などの監視機器が至るところにある。

それらの情報は『竜胆』に送られ、基本的に即時削除。最高位オペレーターですらサルベージは難しいらしい。

しかし、それでもプライベートを侵しているのは変わらないと言つて技研の人が作ってくれたのがこの音声端末と半式神式会話型UI『リンドウ』で、こうして仕事関係の確認にはよく利用させてもらっている。

ちなみに情報庁系列職員に支給される職務用機器のデータは、全て『竜胆』に繋がっているので長官が予定を何かしらの端末に書き込んでいけば、例え伝え忘れていても僕たちが何時行けば良いのかすぐに分かるのだが……

『了解した。では0930に長官室に言つてください。まったく長官殿は……。出勤したら文句を言つておくでござる。』

「まあよくあることだしな。」

「もしかしたら本当に何時でも良かったのかもしれないし、ほどほどにね。」

『だとしても、人の上に立つものとしてもつとキチンとして欲しいでござる。それではまたご用がござればお呼び下され。それでは。』

「あんがとなー。」

「ありがとね。」

『御免。』

静かになった音声端末をみやり、天音がポツリと呟いた。

『『リンドウ』で『竜胆』の電子精霊のAvatarでもあるんだよな。別に良いんだけど何であんな口調に設定したんだろうな。』

「何でも自己成長型だから、誰かが職務用端末に入れた時代劇かなんかに影響されたんじゃないかって新見さんが言ってたよ。」

「そうなんだ。」

「そうなんよ。」

二人して話す内容がなくなったので、残りの朝ごはんを食べるのを再開した。

「『ごちそうさまでした。』」

朝ごはんを食べ終え、腹ごなしがてらにさっきのことも含めて今日の予定を確認していく。

「とりあえず9時半に長官室だから、8時には出ようか。」

「おk。んじゃ片付けは俺がしとくから、ユキはシャワー浴びてきな。長官のところが終わったら買い物だよな。」

「うん。冷蔵庫ほとんど使いきっちゃったからね。帰りにSコープとドン・プライスに寄ろう。他に寄りたいところとかある?」

「んじゃ駅前の本屋に寄ってもいいか?確か読んでるやつの新刊が昨日発売だったはずだからな。昨日はアレで行けなかったし。」

「わかった。帰りで大丈夫だよな?」

「もちのろんだ。」

「お昼ごはんはどうする?まあ、お弁当はできないけど。」

「いつものところでよくね?」

「じゃあそうしようか。」

決まり!という感じにパンツと手を叩き、僕は座布団から立ち上がる。勿論、自分の食器を持って。

「じゃあお言葉に甘えてシャワー浴びてくるね。」

「ああ、片付けは俺がやるからさっぱりしてこい。」

「お願いね。」

自分の分の食器を流しに置いて、一旦寝室に。

下着を取ってお風呂場に向かう。

脱衣所にはバスタオルとフェイスタオルが一枚ずつ、カゴに出してあった。

「天音、出しといてくれたんだ。」

別に大した手間ではないとはいえ、こういう気遣いは嬉しい。

しかし、鏡に写った顔が緩んだ自分を見て少し恥ずかしくなってしまう。こんなの天音に見られたら半日ぐらい弄られるな。

寝間着兼エプロンの浴衣を脱ぎ、バケツの中で中性洗剤に漬けてからお風呂場に入る。上がったらバスタオルも加えて1日分の洗濯機を回すのだ。

お風呂から上がり、使ったバスタオルと浴衣を加えて洗濯乾燥機を回せばもう時計は7時半になろうとしていた。

「お、上がったか。食器は食器乾燥機に入れておいたぜ。」

リビングでは、天音がもう出掛ける準備を整えて録画のドラマを見ていた。

「ありがとう。すぐに準備するから少し待ってて。」

「そんなに急がなくて大丈夫だかな。俺もこの回の結末まで見てから出たいしな。」

「ごめんね。」

とは言っても、服を着て髪の手入れ& a m p ドライヤー、肌の手入れに髪を結ぶのに結局15分以上かかってしまった。

「お待たせ！」

「こつちももう少しで終わるから待ってくれ。」

「わかった。」

見るとどうやら丁度終盤で、その回の事件の謎解きを主人公の弁護士がやっていた。うん、確かにそこならもう全部見るよね。

ついでにどうせならと僕も座布団に座り、その謎解きを見してみる。こういうドラマって終盤だけ見ればあらすじは分かるから、こういう時でも置いていかれずに楽しめるからいいよね。

ドラマが終わったのはそれから10分後。時間も7時55分ではないんだかんだちようどいい。

「いやー、確かに少し怪しいとは思ったけど、それでも不倫相手の奥さんが真犯人とは。」

「ある意味、最初の痴情のもつれていうのは合ってたね。」

「確かにそーだな。」

お互いにドラマの感想を言いつつ、よっこいしょと立ち上がった。

「リビングの戸締まりは？」

「片付けた後にやったぜ。」

「了解。それじゃあ行こうか。」

戸締まりを確認し、二人で玄関に向かう。

「そもそも、ここに盗みに入るとか命知らずだろ。」

「そうだけど、コソドロはそんなの分からずに入るし、伝説クラスも腕試しに来るかもしれないからね。」

「腕試しなら戸締まりなんかしたら、余計燃えるんじゃないかね？」

「まあ、気持ちの問題だよ。」

冗談を言い合いながら靴を履き、外に出る。

オートロックが作動したのを確認し、二人して扉に一言。

「行ってきます。」

駅行きのバス停に向かい歩き始めた。

第二話

『おはようございます。長官殿。では、そこに正座なされよ。』

日本を陰で守っていると自負する情報庁長官、葛葉 智晴にとつて自らの職務室の扉を開けた瞬間に飛んできたその言葉は、ある意味若いころから聞きなれたセリフであった。

「おはよう、リンドウ。はて、正座というがいったい何故だね？2か月くらい後なら新入職員からのクレームがあるかもしれないが、今は皆のヘイト管理はきちんと出来ていると我ながら自負しているのだがね」

『そもそも拙者に正座と言われて、すぐさま自らの言動に問する事かと思うあたりに色々と言いたいがあるが、今回はそうではない。』

リンドウからの返しに、葛葉は困惑した。

自分の言動以外にリンドウから文句をもらう心当たりが全くなかったのだ。

「となると私には全く心当たりがないのだが。もしかして何かの重要書類の決済を忘れたか？いや、ここ最近書類は溜めていなかったからそれはないはず・・・」

『分からぬか。長官殿、おぬしは昨日紫乃宮殿と藤堂殿に「報告は明日でいい」と言っておったな？』

「言ったね。それがなにか？」

全く関係ないと思っていたことに話が飛んだため、葛葉はいよいよリンドウに完全な自意識と感情が発生したか？と考え始めた。あの二人のことは、葛葉を含む情報庁系列職員は皆何かと気にかけている。リンドウの本体たる『竜胆』も当然そのことを学習しており、もしかすればそれでリンドウが暴走しているのかもしれない。と。

『何時来ればよいのだ？』

「えっ？」

だがどうやら違うらしい。

『だから来る時間のことだ。彼らは表向き外部委託者だ。そうでなくとも一応目上の者に目通りをするのだ。アポイントメントは常識

として必要だろう。確かに昨日の時に聞かなかった彼らも悪かろう。だが、彼らは今朝それに気付き拙者に確認をしてきた。それに対しておぬしはなんだ！彼らと会う時間どころか今日の予定にすらそのことを書いておらぬではないか！」

「それは昨日の今日だし、別に二人にはいつ来てももらっても問題なんかないからいいかなと・・・」

『昨日の報告だけならそれでもよかろう。予定ぐらいには書いていてもよいと思うが。』

「電子精霊とはいえ機械が『思う』って」

『そこはいつでもよかろう。報告だけならともかく、新たな任務の交付もするのでござろう？ならばその任務に関する資料は？本体にはその任務の概要しかないのが？』

「それは今日、総務に頼もうと」

『ならば尚更時刻まで決めよ！確かに資料の作成は2〜30分もあれば終わるが、だからこそ期限が今日中とすると彼らは別の仕事を優先する。となれば、彼らが来た時に資料がないということにもなりかねん。』

自身の^言考えを^訳述べるも、その全て切って捨てられ葛葉は自らの不利を悟っていた。

元々、葛葉は何事もその言動で相手をイラつかせペースを崩し、そこを衝くことで自分のペースに持っていく人間だ。

しかしイラつくということがない機械や、ペースを崩さない真性の天然やマイペースな人間は特に舌戦において天敵であった。

故に葛葉は「わかったわかった」と後退を始めた。わざわざ説教を長くする意味はない。

「で？リンドウのことだ。もう対処してくれたんだろう？」

『0930に彼らには長官室に来るように言っている。総務のほうにも急ぎの案件ということで資料作成を頼んだ。』

「さすがリンドウ！頼りになるね。それじゃ私は少し飯田君に用があるからっ」

長官室から逃走するべく扉を開こうとする葛葉。

しかし扉はびくともしなかった。リンドウによって当にロックされていたのだ。

『限定霊機すら持っていない今のおぬしが逃げられるわけなからう』

その言葉にすぐに逃げればよかったかと肩を落とす葛葉へ『もつとも』とリンドウからの追い打ちがかかる。

『逃げたところでこの建物からは出さぬし、その場合館内放送で続けることになるが』

『どうなさる？長官殿』という降伏勧告に葛葉は諦めて両手を上げるしかなかった。

悠希と天音がやってくる、1時間前のことである。

「ユキ、何見てるんだ？」

庁舎へ向かう電車の中、僕がARの映像を見ていることに気付いた天音が声をかけてきた。

「梅西さんたちが作った『真説・第三次世界大戦とその後』てやつ。なんか今度売って資金源の一つにするつもりだから、情報^身庁職員^内で何人かに見てもらっておかしなところがないかチェックしているんだって。」

「んなもん金になるか？その手のものなんて今日日結構あるだろ」

天音が言う通り、この手のものはありふれている。

内容もそれ自体は教科書を少し詳しくした感じだ。

だが、映像と音声で半催眠状態に誘導することで無意識に知識を植え付けるようになっていてこれは、受験生などには有難いんじゃないかな。

けどこれ、調査部あたりの催眠洗脳技術を流用してるよね。それでいいの？情報庁。

「まあ、見た感じそこそこ売れそうではあるかな。」

ふーんといった感じで興味を失ったらしく、仮想端末をやり始める天音。

僕以上に勉強嫌いだから仕方ないけど、もう少し興味を持ってもいいんじゃないかな？近代史系は天音の一番苦手なところだし。

つてそうだ！天音みたいな人にこそ役立つじゃんこれ。
よし、早速見せよう。

「天音？」

「ん？」

「そういえば、これの感想を言えば梅西さんから報酬がでるんだって。」

報酬という単語が出た瞬間、天音がビクつとした。

今月、お小遣いがピンチなの僕が知らないと思った？

あと一週間ちよつとはいえ、よく買い食いする天音にとってこのタイミングでの臨時収入はできれば欲しいはず。

「・・・そうなのか？」

ヒット！いや〜ちよろい。

後は釣り上げるだけだね。

「うん。どう？天音も見えない？見て感想言うだけで報酬なんて、結構おいしいと思うけど。」

この時に天音に見えないよう小さく別窓を展開し、梅西さんにメツセージを飛ばす。

報酬のことは本当だが、それは天音が望むようなものではないので根回ししておくのだ。

直ぐに承諾の返信があり、準備は完了。天音の勉強しなさ加減には梅西さんたちも手を焼いていたのでちようどよかったのかな。

「ね？一緒に見ようよ、ほら」

そしてこつちでは少し善意を暴走させた気味に、了承も取らず仮想端末を接続する。

「ちよつ、まっ」と天音が驚いているが「ダメ？」と少し期待した目で見つめればそれで勝ち確。

「しよーがねーな」と一緒に見る態勢に。うん、お互い好き同士なのはこういう時楽だね。だからハニートラップとか未だに無くならないんだらうけど。

それはともかく
閑話休題。

「それじゃ、再生するね。」

「おう」

お互いちよつと密着し、最初の動画プログラムを再生する。
全三章構成だけど、時間的にこの第一章しか見れないだろうな。
そしてロードが終わり、動画が流れ始めた。

真説・第三次世界大戦とその後 第一章

第三次世界大戦。

それはそれまでの歴史を過去のものとし、新たな歴史の幕開けとなった転換点とも言える戦いだっただ、

本動画プログラムでは、全三章に分けて第三次世界大戦についてとそれがもたらした影響を追っていこうと思う。

第一章 第三次世界大戦の概略ともたらしたもの

第三次世界大戦。

世界再構成戦争ともいわれるこの戦いは、まさしく歴史の転換点となった戦いだっただ、

大戦の前夜祭、極東紛争とのちに呼ばれる日本と現高麗自治区、当時の朝鮮共和国との戦いは当時ではいつ起きてもおかしくないと言われていた事態であり、これが第三次世界大戦に発展していくとは思われていなかった。

朝鮮共和国の前身の一つである大韓民国と日本との間にあった領土問題。

これは朝鮮共和国にも引き継がれさらに激化していた。

毎日のように上陸しようとしてくる朝鮮共和国の揚陸艦隊に対し、海上保安庁の巡視船では危険だと保安官を乗せた護衛艦が追い払うといった状況。いつ戦端が開いてもおかしくなかった。

そんな中、運命のその日1発の弾道ミサイルが朝鮮共和国より放たれた。落下予測地点は九州北西部。恐らく佐世保に対する攻撃だろうと考えられ、迎撃とともに日本政府は朝鮮共和国に対し遺憾の意を表明しようとした。その時はまだ日本は事なかれ主義だった。

しかし、遺憾の意では済ませなくなっただ、ミサイル迎撃のために出動した護衛艦に対し突如海中より対艦ミサイルが飛来したのだ。これにより弾道ミサイル迎撃は成功したものの護衛艦1隻が轟沈。

これが極東紛争の幕開けだった。

その後、極東紛争自体はすぐに終結した。というよりは戦線の一つになったというほうが正しい。

日本が国際社会へ訴えた際、当時の中国が朝鮮共和国を擁護。これに中国と結びつきの強い国とロシアが同調。更に中国は在日米軍を「最大の火種」と非難し、1週間以内に撤退を決めねば排除するとほとんど宣戦布告と言えることをアメリカに通告したのだ。

当然認められるはずのないアメリカはこれを拒否。かくして狂乱と回帰と進歩の第三次世界大戦が幕を開けたのだ。

詳しい大戦の推移は第二章にて語るためここでは省くが、核戦争となるかと思われたこの戦いにおいて核兵器は結局のところ実戦では使用されなかった。

これには様々な要因があるが、その一つとして魔術の復活が挙げられる。

当時劣勢ながらも核兵器の使用を戸惑っていた中国は、核兵器に代わる戦略兵器を模索していた。その際、偶然にも古代の王廟より発掘されたのが生贄による異獣の召喚使役魔術の記された古文書だった。

これに目を付けた一部の者がほかの王廟や古い寺院などを調査、発掘。

研究の末、第一回実験で技術理論の検証・確認。第二回実験で異獣の性能が試され、実戦投入が決定された。

これにより一部の戦線が巻き返し始めた。

何と言っても下級のゴブリンなどですら、純粋な物理攻撃では対戦車兵器クラスでないと撃破できないのだ。見た目が異形とはいえ人型サイズのものにそんなものを使うことなどまずなく、更に数もそこそこいる。敵には不死身の化け物に見えたという。

この結果に中国共産党上層部は喜び、さらなる研究を命じた。掃いて捨てるほどいる人民の少しささげるだけで強大な力が手に入る。このままいけば世界を我が物にできる。と。

しかし、アメリカ陣営も黙ってはいなかった。スパイなど諜報活動の限りを尽くし、何とか魔術の情報を手に入れたのだ。

だが、アメリカは当初そんなものを信じなかった。当たり前といえ

ば当たり前である。科学の時代にいきなりはるか昔のおとぎ話で巻き返されているなど、信じるほうがどうかしている。まだ、最新の生体工学で作られた生物兵器と言われたほうが納得できたのだ。

が、これを信じた者たちがいた。日本である。

日本の裏の歴史を管理していた宮内庁は魔術の存在を知っていた。神話の頃を含めれば2700年近い歴史がある天皇家、そして日本。当然、その歴史には魔術が実在したと考えられる事柄がいくつもあったのだ。

宮内庁、及び天皇は国家存亡の危機として全国の神社へ資料を求め、教会や寺にも協力を要請した。

結果得られた資料から、異獣への対応法を見つけ出すことに成功。

防衛装備庁と協力しアメリカ陣営の反撃の一矢となる試作対異獣兵器『試製36式魔纏誘導弾』を開発。

朝鮮半島戦線で猛威を振るっていた巨鳥に対し使用され、見事これを撃破。魔力搭載兵器の有用性を示した。

これを受け各国は魔術、魔力搭載兵器の研究開発と改修を始めた。この時に生まれたのが後の霊機に繋がる『37式魔纏機鎧』と『MS S（マジクス・サイボーグ・ソルジャー）』である。

さて、アメリカ陣営の反撃に慌てた中国側。これまでほぼ無敵を誇っていた異獣が撃破されはじめ、異獣に任せていれば大丈夫と士気が緩んでいたため戦況はみるみる悪化。戦線の崩壊も起こり始めていた。

これに対し上層部は更なる強力な異獣の召喚を命令。この頃から異獣に霊殻を持った種が表れ始めた。

今までよりも強力な異獣の出現にアメリカ陣営の各国は研究を加速。一進一退の攻防の中で遂に新たな術式を開発、魔法陣化することに成功。同時期に甲種霊機、その少し後に乙種霊機が開発され、戦況はアメリカ陣営に完全に傾いた。

これは度重なる異獣召喚のため、生贄の事実が国民に露見し各地で反乱が発生し中国がその鎮圧に追われたこと。それにより中国の支援で成り立っていた中国側の国の継戦能力が大きく削がれたこと。

中国寄りの中立を保っていたロシアが冬に入り、中国のフォローが難しくなったことが要因でもあると言われる。

中国は反乱の鎮圧に追われながらも逆転の芽としてとして、いよいよ核兵器の使用と大規模召喚儀式の同時実行を決定。

しかし、反乱で混乱している中国には多数の工作員が入り込んでおりこの情報はアメリカ陣営に筒抜けだった。

これを逆に利用し戦争を終結させようと考えたアメリカ陣営はファイナル オペレーション・ミーティアシヤワーを立案。

これは中国側諸国の核兵器関連施設を同時に強襲・制圧し、大規模儀式に対しては新開発の核に代わる戦略破壊兵器『39式連鎖増幅術式刻印弾頭型地対地弾道誘導弾』（日本開発、アメリカ量産）、通称幻爆を打ち込み最後通牒を送る。更に制圧が失敗したときのためにアメリカ陣営各国のミサイル迎撃システムを弾道ミサイル用にフル稼働させるという歴史上最大規模の多国合同作戦だった。

結果としてはこの作戦は7割方成功と言われている。

確かに核兵器関連施設はすべて制圧され、大規模儀式場に打ち込まれた幻爆は所定の性能を發揮した。

中国側は降伏し、約5年続いた第三次世界大戦の終結という正にこれだけなら大成功だっただろう。

しかし、そうではないのは何故か。

それは大規模召喚儀式と幻爆の魔力が侵食反応を起こし召喚術式が暴走。爆心地付近は空間的な特異点と化し、以降どこからともなく異獣が世界各地に現れるようになったからである。

これは、召喚術式が大規模なものでもあったために暴走の結果異獣の棲む世界そのものを召喚してしまい、二つの世界が融合していつているからではないかと言われる。

仮にこの説が正しかった場合、恐らく百年単位ではあるが徐々に世界は混ざり合い人類は危険ながらも新天地を手にすることになるだろう。

さて、長くお付き合い頂いた第一章はここまでとなる。

戦後35年がたち、今日では当たり前となった魔術、異獣だが、そ

の現代での始まりは理解されただろうか。

第二章は第三次世界大戦の詳しい推移。

第三章は戦後の復興と新たな災害となった異獣襲来に対する我が国の対応となっている。

よろしければ第二章、第三章とお付き合い頂きたい。
それでは。

第三話

梅西さんの（半洗脳）教育動画を一つ見終わったところで、ちょうど庁舎の最寄り駅に着く。

「なんか内容は普通なのに、妙に頭に残ってるんだが。」
まあそういう動画プログラムだし。

「そう？じゃあ天音には合ってたんだよ。きつと」
そうとはおくびに出さず「そうかなあ？」と納得していない天音をはぐらかしつつ庁舎に向かう。

庁舎是最寄り駅からは歩いて3分ほどの、見た目は5階建ての雑居ビルだ。

他の政府の建物のように建物名が石に刻まれているわけでもないので、知らなければ普通にスルーしてしまうだろう。

「おはようございま（〜）す！」

情報庁庁舎

所在地は情報庁に関して公開されている数少ない事項の一つであり、様々な都市伝説に使われる建物。

庁舎に入り、ゲートを通った先で僕たちは挨拶をしていく。

天音は最初の頃はしなかったのだが、梅西さんたち教育組によるO H A N A S H I と僕のお願い（共感性M A X）により今ではきちんと挨拶はするようになった。

現在9時15分。

途中挨拶返しとともにちよつとした雑談をしつつ、長官室に向かう。

「おーユキちゃん、アマちゃんおはよう！昨日はお疲れ様。報告かい？」

「はい。これから長官に」

「あら？天音ちゃんに悠希ちゃん久しぶり！いやー、なんか二人に会わないと日本に帰ってきたって感じがしないわ」

「玲奈さん!?!いつ帰ってきたんだ!?!」

「昨日よー。二人とも後で調査部にいらっしやい。お土産があるか

ら

「マジ!?お菓子?それとも」

「ほら天音、そういうのは後の楽しみにね?玲奈さん、お久しぶりで
す。後で調査部に顔を出しますね。」

「待つてるわ〜」

「はい、おはよう。二人とも昨日はお疲れ様。それとも久しぶりに
暴れてスツキリしたかしら?」

「おう!と言いたいんだけどなあ」

「貫通爆撃でケリが付いたので、少し不完全燃焼気味ですね」

「フフ、私も最近溜まってるからその内模擬戦しましょう?」

「渡辺の姉貴とやるのは楽しいからな!お願いするぜ!」

「私は姉貴なんて柄ではないわよ。それじゃ、予定が合ったらやり
ましようね。」

こんな感じだ。

保護からそのまま事実上の所属となった時は庁内の意見を三分し
たけど、今ではなんだかんだ認めてもらえていると思っっている。

と長官室に着いた。

時刻は9時20分

少し早いけど私は対応中になってないから大丈夫でしょ。

「天音、おk?」

「おk」

そもそも気負うことはないんだけど、一応天音に確認を取る。

僕たちなりのルールとして、こういう部屋に出入りするときだけは
きちんとその場に則った礼儀を守ることになっている。

でないと僕たちのことを知らない新入りさんが色々勘違いを起こ
してしまうのだ。

実際、過去にそれで天音が絡まれて面倒臭かったし。

コンコン・

「どうぞ」

「紫乃宮、ならびに藤堂、入ります。」

「失礼します」

長官室に入ればそこにあるのは長官の執務机と端末、来客用のソファーにテーブル、後は中に本以外の色々なものが入っている本棚、ウォーターサーバー、日本国旗だけと大分質素だ。

その部屋の主は燃え尽きたように机に突っ伏していたが。

・・・え？

「なあ、長官。だいぶ疲れてるみたいだがどした？」

いつもは少し刺々しい天音も流石に心配になったらしく、どこか労りに声をかける。

「いえ、リンドウに責任ある上に立つ人間の心構えというのを、つい先ほどまで説かれていただけですので気にしないでください。」

どうやら僕たちの朝の一件から派生したっぽいことを言う長官。

自業自得だとは思うけどお疲れ様です。

「私もリンドウと新見君だけは口で勝てませんからね。だから皆、リンドウを私にけしかけるのでしょうか・・・」

「とりあえず、状況は分かりましたから報告をしいいのですか？」

ちよつと長官の心に触れてみると疲れたと愚痴りたいが流れ込んできたので話の方向性を変える。

このままだと20分くらいは愚痴りかねない。

「いくら私が嫌いだからって・・・ああはい。報告ですね。どうぞ大丈夫かとは思いますが同情はしない。嫌われたくなければもう現場は引退したのだから言動を矯正すればいいんだし。それができないわけでも無しに。」

「とりあえず、長官の状況は無視で」と天音にアイコンタクトを送れば「了解」と返してくる。

「詳しくは国防軍より届くと思いますが、2071年3月24日16時20分紫乃宮、藤堂ともに現着。対象と接触、戦闘開始。同16時30分百里基地より2機のMP-5/Bが飛来。紫乃宮、藤堂両名の対爆防御後、貫通爆撃を実施。同16時34分異獣の魔核の破壊を確認。任務完了として第二大隊に引き継ぎました。規則違反などはなかったと思います。以上です。」

言葉にすれば昨日のことはたったこれだけしかない。無論、細かい

ことはいくつもあるがその辺りは国防軍の報告書を見ればいい。

「私からも補足事項は特にありません。」

僕たちの報告を聞き終えたあと、長官はいくらかは精気を取り戻した感じで椅子に腰掛け直した。

「結構です。報告を受領、任務の完遂を認めます。お疲れさまでした。」

報告を受けた後の決まり文句を言ったあと、長官が「さて」とセリフを続けてきた。

あれ？何かあるのかな？

「実は二人には次の任務の話があるのですが、少し前置きをさせてください。」

「次の任務？」

天音が聞いているか？と問いかけてくるが、僕も知らないと言を横に振る。昨日の間に決まったのだろうか？

「実のところ、この任務の話自体は1ヶ月ほど前からありました。ですが、この任務を君たちに命じるか私と飯田君、新見君に梅西君、米田君と何回か会議をしましてね。」

長官に隊長、技術研究部長に僕たちの教育係の纏め役たる梅西さん。調査部長の会議があるって一体どんな任務なんですかね……。

少し冷や汗を掻きながら長官の話を聞く。

「君たち二人を保護し、早8年。仕方ない部分があるとは言え、こちらの都合で君たちをこちら側で通用するように育て、こんな仕事をやるようにしてしまいました。それは私たちの罪なのでしょう。」

なんか懺悔みたいなこと言い始めた!?

そしてなんかまともでシリアスなこと言ってる長官を見ると少し寒気がするんですけど！

チラッと天音を見れば天音もこめかみの辺りがピクピクして表情が強張っている。

ついでに触れた訳でもないのに「恐怖」の感情が天音から流れてくるし。

「しかし君たちはそのように育てた私たちに普通に接してくれてい

る。が、君たちから普通を奪った片棒は確実に私たちです。そんな私たちがこのような任務を命じてよいのかと、まあそんなわけで会議があつたわけです。」

マジでどんな任務なのそれ!?

もうやだ! 聞くの怖い!

「さて、では任務を言い渡します。」

キター!

「紫乃宮特位、藤堂特位、君たちには2072年4月1日を以て、国立魔導高等学校 仁徳学園に入学してもらいます。」

・・・は? 入学?

「すみません、長官。上手く聞き取れなかつたみたいなのでもう一度お願いしても宜しいでしょうか」

「おや、悠希君が聞き取れないとは珍しい。いいでしょう。てはもう一度。君たち二人には4月1日付けで仁徳学園に入学してもらいます。これは特A級の任務であり、こちらが認めざるを得ない理由がない限り拒否は認めません。」

はく!? 何で魔導高校とは言え学校に入学が任務なの!?

しかも特A級で準強制動員クラス、つまり基本拒否できない国家の行く末を左右しかねない任務でこと!?! 入学が!?

「長官、悪いがちよつと聞きとれ「天音、それループだから。僕も混乱してるけどとりあえず受け入れよう? ほら、見てよ長官がすごいニヤニヤしてる。」・・・ワリイ」

とりあえず天音のループ発言を止めることで少し冷静になったが、それでも混乱は続いている。

まず、魔導高校に入学。これは百歩譲って別にいい。問題はそれが特A級任務ということだ。

特A級任務とはさつき思つた通り国家の行く末に関わると思われ、事態に政府側、書類上は上位組織の防衛省から通達される任務だ。長官が遊び半分に設定できる任務種別ではない。

僕たちが学校に行くことが国家に関わる。そんなことはまずあり得ず、となると・・・

「長官、笑ってないで続きをお願いします。どうせ入学することだけが任務ではないんでしょ？それとも封印解いて一緒にになります？」
「ふふ、いやなに、あまりにも面白かったものだからついからかってしまった。すまないね、ほらこのとおり」

そう言つて長官は手にはめたマスケットにお辞儀させる。

・・・謝る気ゼロだね、そしてそのマスケットいつの間にはめた。ただまあ、こんな感じの長官のほうが安心感がある。さっきのシリアモードは正直気持ち悪かった。

「つまりは、さっきの懺悔みたいなのも俺たちをからかうための演技だったってことか？いやー安心したぜ。なんかおぞましかったしな。あれ」

「いえ、確かに仕込みの一環ではありましたが演技ではありませんよ？」

ん？

「さっきのは確かにからかうための準備でしたが、嘘ではありません。まあ、私個人だけでなく情報庁総員の気持ちではありませんがね。あと、悠希君はそんな簡単に封印を解かないでください。掛けなおすの面倒ですから。・・・話が脱線しましたね。」

「誰のせいだと」

「さあ？」

え、じゃあ僕たち皆からさっきの懺悔みたいなこと思われてるの？
うわあ恥ずかしい！多分今の僕真っ赤だろうな。天音もだし。

「さて、話を戻します。今回の任務は護衛任務です。対象は今春に仁徳学園に入学する『天城 快人』15歳男性です。』

これが資料です。の言葉とともに仮想端末に着信。

開けば確かに任務資料と題されていた。どれどれ・・・

『天城 快人)あまぎ かいと) 15歳。男性。社交的な性格で一般的な正義感を持ち、多少のカリスマ性がある。ただ、少し潔癖症なところがあり、困っている者や何か事件を身の回りで見つけると後先考えず行動してしまう点に注意が必要』ってめんどくさっ！こんなザ・勇者です！みたいなやつホントに居るのか」

うん。天音の言う通り近くにいれば損得抜きに助けしてくれるいい奴だけど、少し離れた立ち位置だと面倒臭い。

特に護衛という立場からすれば、じっとして欲しいのに勝手に関わらなくていいことに関わってしまいそうで今から気が重くなるなあ。

「えーと?」母親とは幼くして死別しており、現在は義理の母と同年齢の妹がいる。父は京都大学魔導学部の教授で、現在丙種霊機開発プロジェクトの一員。義母は同大学附属病院の麻酔科医。家族仲は悪くなく、むしろ再婚とお互い連れ子がいる点を考えればかなり良好な家庭環境と言える。『へえ?親達は忙しくても週に2日は家族と過ごす日を作るようにしてるし、義妹とも同年齢で思春期真っ盛りの割には上手くやっていると。何て言うか、すげえ羨ましくなる家庭環境だな。』

両親もそりやあ完全に平等ではないにしろ、二人の子供に分け隔てなく接して愛情を注いでいる。夫婦仲も悪く無し。医者と国家プロジェクトの一員だから世帯収入も高いと。うん、なにこの絵にかいたような幸せな家庭。裏山。

『昨年11月、父親の手伝いとして丙種霊機のデータテスターとなる。結果、過剰適合。丙種の目的である疑似固有術式ではなく本来の固有術式を発現。以降、霊機は最適化されデータ収集を行っている。疑似固有術式と固有術式の同時発現者となる可能性が最も高く、固有術式の効果も鑑み準重要人指定されている。』うわっ、運命力まで高いのかよ。こんなん絶対面倒事がやってくるじゃん」

「いや、自分から面倒事に飛び込んでいくんじゃない?性格的に」

「あーそうじゃん!うわっ今からやる気失せるんだけど」

もうこれ本当にどこの主人公ですかね。本当にありがとうござい
ます。

イヤだー

「最後だな。『固有術式名は『奏縁の調べ』、効果としてはその身に受けた術式の模倣・合成。これは検証段階だが他の固有術式も模倣・合成できる可能性が高い』い!?は?ふざけんなよコイツ!」

「何て言うか、もう・・・」

「ついでに付け足すと今年は何かしらある新入生が多いそうです。政府がそういう生徒を仁徳にできるだけ集めているのは、言外に『任務ではないが彼らも護れ』と言うことなんでしょうね。ちなみに女子の比率が高いそうですよ。」

もうやだ・・・この任務受けたくない。絶対面倒じゃん！

「さて、なぜこのような任務が下されたのかは理解できませんね？」

「ただでさえ機密性の高い試製三種霊機の使用。さらに」

「固有術式で術式を合成できるから実質的にいくらでも疑似固有術式が作れる。さらに他の固有術式も模倣・合成できる可能性があるおまけ付き。そして出が民間である以上・・・いや、そうでなくともこんな情報遅かれ早かれ絶対に漏れてしまう。そうなれば動きそうな輩が直ぐに思い付くだけで4つはありますね。」

一応、同盟国ではあるが諜報工作には節操のないアメリカの工作機関各種

未だ大戦の結果を受け入れない中国共産党残党及び強硬過激派の国々

大戦に乗じて世界の闇商人達が連合してできたイリーガル・カンパニー

そして僕たちとも因縁深い神帰教

情報庁が僕たちをこうなるよう育てたというならば、神帰教は僕たちをこういうようにしか生きられなくした元凶だ。

それ以外にも動きそうな組織はいくらでもある。確かにこれは特危対応隊神風の仕事だ。仕事、なんだけど・・・

「追加人員なんかはありますか？」

天音と二人ではちよつと厳しい。

能力的にはできるといふ自負はあるけど、多分天音が、ついでに僕もストレスで爆発してしまう気がとてもする。

だからストレス分担のためにもう少し、例えばさつき会った渡辺さんとかが欲しい。

「こちらもできる限りのバックアップとフォローをしますが、護衛

として学校内に入るのは君たち二人だけです。理由は・・・」

「こんな時に教職員増やしたらあからさまに怪しいもんな。抑止力にはなるだろうけど、逆にそいつがない時なんかはしょっちゅう狙われる羽目になる。なら、一見護衛がないように見せかけて、疑心暗鬼を誘うのと向こうで膠着状態を作ってくれた方がいい。」

「その通りです。天音さん」

頭ではわかってはいるのだ。

少なくとも今年の新入生が卒業するまでの三年間、仁徳学園に新たに赴任する教職員は狙う側からすれば護衛にしか見えないだろう。

目に見える護衛ということで、躊躇はさせられるかもしれないが誘拐殺害かと同時に護衛を襲撃されれば向こうの成功率を上げてしまおうし、多組織で連合されでもしたらたまたまったものではない。

逆に一見護衛がないように見えれば向こうは護衛がいるのかいないのか、いたとすれば実力はどれほど?と疑ってかかり散発的な威力偵察から始めるだろう。

いずれはバレるだろうが、その間に護衛対象に自衛能力を付ける時間稼ぎができる。

さらに疑心暗鬼に陥っている以上、他の組織と共に動くというのは難しくなり、先に動けば漁夫られるというような膠着状態ができれば完璧だ。

そうなるためには護衛と判りにくい護衛、すなわち同年代の生徒に紛れた護衛が必要だ。

僕たちは今回の場合、背丈で多少注目されるかも知れないが、まず間違いない紛れ込めるし実力も折り紙つき。正に打ってつけだろう。

だけど・・・

「心配すんなってユキー!」

「天音・・・?」

気付くと天音に後ろから抱き締められていた。

え?こんな真剣な時に何してるの!?!やめて!?!僕たちのことをよく知ってるとは言え長官もいるんだよ!?!

だが僕の内なる叫びを意に介せず、天音はさらに力強く、だけど僕

が苦しくないよう抱き締め頬を撫でながら僕に語りかける。

「俺がこの任務やったらキレルんじゃないかって心配してくれたんだろ？ありがとな。確かに護衛対象はいけすかねえ奴だしキツそうな任務だ。キレかけることがあるかも知れねえ。けど、そんな時はユキが逆にこうして止めてくれればいいし、最悪昔みたいに溶けてもいいかもしんねえ。俺とユキならなれてるから事故も起きないだろうしな。」

「だから」と耳元で囁く天音。

なにこのイケメン・・・ぎゅーつもなでなでも好き・・・幸せ・・・
「やってやろうぜ。ユキとなら大丈夫だ。俺はユキを護るし、ユキは俺を護る。俺たちってそういうもんだろ？」

「うん・・・」

天音・・・しゆき・・・ずっと一緒「ゴホンッ」

!?ハッ!ヤバい!トリップしてた・・・これ長官に見られたのか・・・
多分庁内に途中からでも中継されてるよなあ・・・後で弄られるんだろうなあ・・・orz

「お話は終わりましたか？」

「おうー!」

「はい・・・」

何で天音はあんなセリフ吐いたのにはずかしがってないんだろうか。ほら見てみーよ、あの長官の顔。からかった時よりもニヤニヤしてるじゃん・・・

いいや、諦めよ・・・どうせ他にも恥ずかしいことたくさん知られてるし、1つくらい増えたところで誤差だよ誤差。うん、よし。

「取り乱してしまい申し訳ありません。長官。追加人員についてはわかりました。」

「気持ちには分かりますからいいですよ。まあ、先ほども言いましたがバックアップとフォローはできる限りしますし、学外については私たちも全力でかかります。それが仕事ですし。ただ、おそらく漏らしがどうしても出ます。基本、君たちにはそちらの相手をしてもらうことになるでしょう。」

「はい」

「では、残りの通達事項を伝えます。」

とまたデータが送られてきた。

「任務に関する諸通達事項？」

「量が多いので詳しくは後でそのデータを見てください。私からは重要な部分だけ。」

なるほど。お上からの任務だから通達が多いのか。

すごい、二ページにわたってぎっしり書いてある。これ、天音は読む気起きないだろうなあ。

「まず、君たち二人は公式には聴講生のような立ち位置になります。在学中は名簿に名前がありますし成績も出ます。しかし、それらは公式には残らず、学園を離れた時点で全て抹消されます。まあ、正式に受験して入学するわけではないですし当たり前ですね。」

これは長官の言うとおり、当たり前だね。そうじゃなくとも情報秘匿があるし。

「次に本任務における制限などですが、極めて長期な上に状況が流動的に変化することが考えられることから条件付きでオールフリーとします。」

「長官。条件とは？」

「事後報告でいいので、こちらに通達してください。こちらの処理もありますので。」

「ん？長官。ちよつといいか？」

珍しく天音が質問した。基本的にこういうのは僕任せにするんだけどさっきのことがあるからかな？天音・・・ふわふわ・・・ってそれは今は考えない！

「はい、何でしょう？」

「本当に事後報告さえすればオールフリー、つまり完全自由裁量でいいのか？」

「はい。それがなにか？」

「例えば民間協力者契約なんかも？」

民間協力者契約。

情報庁において民間人を重い守秘義務付きで準職員として扱う制度で、主に調査部によって行われるもの。僕たちも一応これになっている。

「けど、それを出してくるか。確かにもしかしたらやることになるかもしれないけど・・・」

「問題はありませんが、流石に事前に相談ぐらひは欲しいですね。あ、秘匿情報保持契約は事後報告で構いません。事前に相談できない状況もあるでしょうし。」

「わかった。ありがとな」

「いえいえ。天音さんが質問とは珍しいですが、わからない箇所があれば訪ねるのは重要なことです。」

長官の言うことは前から教育係の人たちに言われていることだ。

にしても民間協力者契約、あれは悪魔の契約とも呼ばれるほどきちんと確認しなければいけない罠が多い。

できればやりたくないが、どうしても必要になればその時また考えよう。

「最後に、状況によっては一時的に最大で少佐クラスの権限を国防軍全体に対して君たちは持つことになります。権限を得る場合はその状況が予想される場合に階級も含め通達しますので、通達内容はよく確認してください。」

「これは主に異獣迎撃における学生協力の時とかかな。」

めったにあることではないが、後方の防御を魔導高校や大学の学生が受け持つことがある。後方なので、それだけなら学生に紛れるだけで問題ないけどそれに乗じる組織勢力が無いとも言えない。

そういう時の措置だろう。

「あと、これは私からの助言です。」

へえ、長官からの助言なんて久しぶりだ。

最近「私が口を出さなくても大丈夫でしょうか？」というスタイルだったんだけど。はじめての長期任務だからかな？

・・・いや、あの瞳はさっきのシリアスモードと同じ、なんかこつ

ちが恥ずかしくなることを言うつもりだ！

「君たち二人は私たちから世間で言う英才教育を施されています。一般教養は高校2年生レベルには達してますし、魔導関連の知識、技術ならそこらの魔導部隊員や戦舞士などと比べ物にならないくらいのもものを持っていきます。」

改めて言われるとすごい環境だよね。

知識は複数人からほぼワンツーマン。魔導戦闘をはじめとした技術は、実は今までやり合った裏の人間がよっぽど雑魚だったということでもない限りまず普通以上ではある自信がある。

「しかし私たちでも教えきれない部分があります。同年代との触れ合いです。青春と言い換えてもいいですね。確かに今回の入学は任務ですが、せつかくの機会です。そういうことも体験してくるのもいいでしょう。」

「もちろん任務が優先ですが」と付け足す長官の顔は一瞬だが、いつもの薄笑いでも演技した顔でもなく、少なくとも僕は初めて見る『子を送り出す親』のような顔だった。止めてよね、そういう不意打ち。なんかジンとくるものがあるから。

「コードの認証はまだ開始ではないのでまた後日に。今ある任務に関する資料は20分後に自動消去されますが、他の資料なども含めたデータチップを渡しますので総務に必ず寄ってください。私からは以上ですが、何か質問などはありますか？」

総務は後で行く予定の一つだったからちようどいいね。

特に今のところ質問もないかな。

僕は特にありません」

俺も同じく」

では、今日はここまでで。昨日はお疲れ様でした。」

官の言葉を聞いて、僕たちは一礼し長官室を出る。

「それじゃ技研と調査部、それに総務。どこから行く？」

「梅西さんのところ行くこうぜ。取りっぱぐれるのはゴメンだ」

動画の感想報酬！という感じの天音。

まったくこの娘は・・・

「はいはい。じゃあ技研に行こうか」

「おう！」

そうして、技研のある地下に足を向けた。

第四話

桜の花びら舞うベンチに少しはなれて座る一組の男女。

新たら制服に身を包み、これからの新生活に期待を膨らませつつ新たな恋の予感を感じるも思春期特有の異性への気恥ずかしさから少し距離を取っている・・・旗から見ればそんな風に見えるかもしれない。が

「ユキ！鳴き飛ばしばつかすんなよ！全然ツモれねえじゃねえか！」

「そりゃ三元牌全部さらされてたら全力で流すよ。親の役満とかツモ上がりでもイヤだし」

実際はお互いに手牌が見えないように距離を取っているだけなんだよね。

さつき顔を赤くしてこそこそ話してた女子二人組、もし勘違いしたならゴメンね？

「だー！結局流局かよー！」

「上がれば1位に逆転できたのにね。まあツモれなかった己の引きを恨みたまえ」

「そもそも全員安牌か鳴いて俺を飛ばすかしてたじゃねえか！テンパイから3回しかツモれないってどんだけだよ！」

「まあまあ。ほら、オーラス始まるよ。まだ倍満直撃させればまだ逆転できるんだから諦めないで。諦めたらそこで試合終了だよ」

「そもそもラス親が1位だから、どう足掻こうとこの局で終わりだけどな・・・あ、ダブル」

「ハイ!？」

結局、本当に一位が振り込み天音が逆転一位で終了した。

・・・鳴きで集めたとは言え、大三元張った次の局にダブル清一色とかそつちがどんだけ感じなんですけど。

「いやー気持ちいい逆転だったわ！お、そろそろ設営終わったんじゃないかね？」

「・・・そだね。行ってみよっか」

二人してネット麻雀をすることになった理由。何か不手際があったらしく入学式の受付が30分延期されたからだけど、本来の受付開始から現在40分が立つし、歩いている(多分)新入生も増えてきた割には学校の方から戻って来る人はいないみたいだから多分開いてるんじゃないかな。

「そういや、仁徳でどんな学校なんだ？よく考えたら魔導高校でこそしか俺知らねえわ」

道を少し歩いたところで天音がふと思い出したように呟いた。

まあ、魔導高校でことが分かってれば別に問題ないんだけど・・・

「じ」仁徳学園。日本に8つある国立魔導高等学校の一つ。関東地方出身の生徒が多いけど、占有空域が他の学校より広いことを活かして完全霊機での授業が他にも多いからそれ目当ての他地方出身の生徒もそれなりにいる。他の魔導高校と同じく人工島で全寮制だけど本土とは橋がかかっているから休日とかに外出する生徒も多いらしいね。その代わり人工島はそんなに施設が充実しているわけではないみたいだけど。あと魔導高校対抗戦ではここ数年あと一歩で感じの成績で伸び悩んでいるつてき。こんな感じでいい？天音、付いてきてるお二人さん？」・・・全部言われた」

とりあえず暗記した学園の概要を答えつつ、恐らく同期だろうベンチを立った辺りから後ろを付いてきている天音の呟きに答えようとした一人と友達だろうもう一人にコンタクトをとる。

「おう！充分だぜーそっちの元気が良さそうなのもありがとなー！」

「気付いてたの!?!」

「貴女、説明しようと声掛けてたじゃない。ごめんなさい。付ける気はなかったのだけど、この子が気になるって聞かなくて・・・。私は風師かざし 紗綾さや。で、この子が・・・」

「氷室ひむろ 香織かおりでいいですよ！今日から仁徳に通う1年生だよ！二人も1年生だよね？もしかして先輩だったりする？」

見た目通り活発そうな人が氷室さん。その保護者というか苦労人ぽいのが風師さんか。多分厄介な新入生ではなかったと思うけど、後で確認しておこう。

けど、自己紹介されたら返すべきだよね。

「僕「俺は藤堂 天音！同じく今日入学の1年だな！これからよろしく頼むぜ！」・・・打ち合わせしてないとは言え被せないでよ。僕は紫乃宮 悠希。天音をはじめ親しい人からはユキってよばれてる。同じく1年だけど、自分で言うのもなんだけど天音共々世間知らずな所があるからもし同じクラスだったら色々迷惑かけるかも。よろしくね、風師さん。氷室さん。」

「よろしくーね？ね？何でベンチで背中合わせになつてたの？見た感じ仲が悪いわけでもないのに」

「ゲームしてたかな。お互い自分の画面が見えないようにしてたんだ」

「へー、じゃあじゃあ・・・」

とりあえず天音は氷室さんとウマが合うのかな？まあ、お互い活発系だし相性が良いのかもね。

じゃあ、僕は風師さんと話してみようか。

「風師さん。なんかゴメンね」

「いえ、元々は私たちが付けるようなマネをしたのが始まりだし、謝らなくてもいいわ。それに香織もなんだかんだ友達ができるか不安がってたしちようどよかつたわ。でも、そうね。私からも気になったことを聞いていいかしら？」

「うん。流石に何でも答えることはないけど」

「いえ、ただ紫乃宮さんと藤堂さんの関係が気になっただけなのよ。幼なじみにしては距離が近い気がするし、だからといってお付き合いしてる感じではないし。まあ、私もお年頃なのよ。答えにくかったから別に答えなくていいわ」

最後の方は少し赤くなって早口で聞いてくる風師さん。多感な乙女の好奇心の赴くままに質問して、途中で今初めて会ったばかりの相手ということを思い出したから羞恥心にかられた感じかな。

けど天音と僕の関係か・・・とりあえずごまかそう。いろいろ複雑だし。

「うーん。ある種の腐れ縁とでも言えばいいのかな。あ、僕はユキ

でいいよ。そっちの方が呼ばれ慣れてるから」

「おいおい、腐れ縁はねーだろ。お互いどっぷり依存してんだから。それと俺も天音でいいぜ」

天音も氷室さんとの話を切り上げて加わってくる。

にしても天音め。説明しにくいからぼかしたのに……

「それって共依存てやつ？」

「あまり口を出すべきではないのでしようけど、健全とは言えないと感じるわね……」

ほらー天音のせいで面倒臭くなったじゃん。

「僕は確かにそっちよりだけど、全然違うからね？ただ天音がちよつと持病持ちで僕が専属の治療師みたいなものなだけだから」

二人の誤解というほどでもないけどあつていない解釈を直すために、僕と天音の関係性の一つを出す。これなら最初からこうすればよかった。

「あ、そうなんだ」

「ごめんなさい。よく考えたら初対面なのにこんな突っ込んだ質問をして……どうやら自分で思っている以上に私も舞い上がっているのかもね」

どうやら聞いてはいけないことを聞いた？と罪悪感を二人に感じさせてしまったみたい。悪いのはどっちかと言えばこつちだから気に病ませることもないけど、どうせだから今後の生活のための布石を打とう。

「いや、天音が誤解されるようなこと言ったのが悪いんだから。それよりこれから僕もだけどこんな感じのこと二人してよく言うだろうから、さつき言った通り同じクラスとかになったらフォローしてくれるとありがたいかな。ほら、天音も」

天音を促すように顔をみながら「同調して」アイコンタクトを送る。するとどうやら僕の意図を察したらしく、ほんの少し悪そうな顔で「了解」のアイコンタクトが返ってきた。

「あー俺の受け答えで誤解させちゃったようだし……すまん。こつちは気にしてないからそっちも流してくれると助かる。ただ、ユキ

共々こんなことをこれからよくやるだろうからそんなときは頼ませてもらっていいか？」

自己紹介で言ったことをこれを証拠として証明し、改めて頼む。

氷室さんは簡単に了承してくれるだろうし、風師さんもこの頼みを償いと免罪符にして僕たちとの関係を深めて欲しい。僕の意図はこんな感じだったけど、天音はそれに完全に乗せてくれた。

実際、僕たちは非常識なことや突拍子もないことを言いかねないし、入学式前に持てた同年代との関係を手放したくない。同じクラスだったらお願いの通り僕たちのフオーロー役。他クラスだったとしても情報網として繋がりを持つておきたいし。

「私は大丈夫だよーっていうか私もさーちゃんによく迷惑かけるから人のこと言えないんだよね・・・」

「あら？香織に自覚があったのね？まあそれでいいのなら実際いつもやっているからお安い御用よ。それじゃあユキ、天音、さつきは本当にごめんなさいね。そしてこれからよろしくお願いするわ」

「私だつてさーちゃんには感謝してるんだからね!?天音ちゃん、ユキちゃんこれからよろしく!あ、私のことは名前で呼んでくれていいからね!なんか昔から名字で呼ばれるの違和感があつて」

まあ、氷室さんは性格と名字のイメージが正直合つてないもんね。うん、これからは香織さんと呼ぼう。

「僕たちこそ改めてよろしく。じゃあ、そろそろ入学式に行こうか。もうさすがに開いてるでしょ」

「お、そうだな」

「よく考えたら話しながら行けばよかつたわね」

「よーしーじゃあしゅっぱーっ!」

4人で入学式会場に向かい歩を進める中、入り口が見え始めたところで香織さんが「あつ」と足を止めた。

「香織?どうしたかしたの?」

「いやーそういえば最初の疑問を聞いてなかつたなつて」

「「最初の疑問?」」

はて?最初の疑問とは一体?風師さんも?マークを浮かべている

し。

「うん」

「元々それが気になったのが天音ちゃんとユキちゃんに興味持った原因なんだけど」と前置きしつつ、僕と天音に問う香織さん。

しかしその瞳は問いかけではなく、ほぼ確認事項のようにしつかりとしていて

「なんで仁徳に通うのに仁徳のこと知らなかったの？いや、それより天音ちゃんとユキちゃんはいっ仁徳を受験したの？」

・・・後でもう一回要注意・意識人物リストを確認しておこう。嘘でも本当でもないことでごまかしつつ、僕は最優先事項として意識にそう刻んでいた。

「新入生諸君、入学おめでとう。とりあえず1年間君たちの担任を務める荒木^{あらかき} 巴^{ともえ}という。担当教科は魔導実技だが、保体の免許も持っているからそつちを受け持つこともある」

香織さんを何とか誤魔化して臨んだ入学式は、あまり記憶に残るものではなかった。というより校長やら来賓やらのセリフが長すぎて退屈だったのでこつそりリストを確認していた。

リストには香織さんも風師さんもやはり載っていないから、少なくとも政府側では把握していないんだろう。となると世間に埋もれた原石か裏からの回し者か。

多分原石だとは思うけど、一応あとで照会しよう。

で、現在教室に移ってホームルーム。担任の荒木先生は調べると機動防衛総隊第一大隊OGで予備役軍人らしい。第一大隊とは僕と天音は関わったことはないから大丈夫そう。

ちなみにクラスは4人とも同じ1―Dだった。

最悪、厄介者で固められている可能性もあったけどどうやら分散したらしい。もっとも護衛対象含め一番厄介者が多いのはこのクラスだけ。

「ガイダンスなどは明日、明後日で行うので本日はもう解散でもいい

いのだが・・・時間もあるしこの後寮で逢ったりした時にお互いのことを何も知らないのは気まずいだろう。なので簡単な自己紹介をしてもらおう。出席番号1番、相川と17番、武本、18番、水流と3番、山葵でじゃんけんをして勝ったほうがもう一方の勝者とじゃんけん、勝った方から負けた方への順番で行こう。例えば武本と水流で決戦をして武本が勝った場合、武本から相川まで順にした後水流に番が回り最後が山葵になる。では、はじめ！」

また複雑な順番決めなこと。

多分、先生が出席番号順を嫌ってるんだらうけど。荒木だし。

結果、山葵さんからの逆出席番号順になった。とりあえずリストに載ってる人から覚えよう。

「山葵 わさび 礼華 れいか といいます。出身は静岡です。よろしくお願いします。」

山葵 礼華さん。

お姉さんが第一大隊の副隊長で、入学試験総合6位。どうやらお姉さんから個人的に魔術を教えてもらっていたらしい。

「俺は明嵐 めあらし 高洋 こうよう という。黙っていても気づく者はいらうから先に言っておくが、俺は明嵐工業の家系の間人だが少なくとも今は皆と同じ仁徳学園の1年でしかないと思ってる。これからよろしく頼む」

明嵐 高洋さん

日本で乙種霊機のシエア第二位を誇る明嵐工業の創業者一族本家の一人。未確定情報だけど固有術式を発現しているとの情報有り。

「私は水流 つる セリナです。父がイギリス人で HALF ですが、生まれ育ちは日本です。好きな飲み物は抹茶です。これからよろしく願います」

水流 セリナさん

世界ランク3位のライアン・水流と女子世界ランク5位の水流通 朱里の一人娘で競技魔導師のサラブレッド。魔力適正のみなら入学試験2位で彼女も両親から英才教育を受けている。

「五月女 そおとめ 悠一郎 ゆういちろう、よろしく」

五月女 悠一郎さん

実戦剣術『五月女流』を伝える家の子息。門下生には警察や国防軍関係者も多い。近接戦に限れば現1年生の中でもトップクラス。

「伊樹島 凜りんです。将来は国防軍を目指しています。伊樹島な名に恥じないよう頑張りますので、皆さんよろしくお願いします」

伊樹島 凜さん

日本最初の甲種霊機適合者にして英雄、伊樹島 晃一郎の孫娘。このをはじめ祖父、両親、叔父、従姉が優秀な魔導師又は魔導研究者のため、たつた3代でありながら魔導の名家と伊樹島家は言われていて彼女にも大きな期待がかけられている。入学試験主席。

そして・・・

「天城 快人かいとといひます。ちよつとした理由で京都から来ました。1—Aに義妹がいるので義妹共々よろしくお願いします」

護衛対象、天城 快人

直接見た感想は輝いてる奴。生来のカリスマ性と性格から若干人たらしの感じがある。僕的には嫌いにはならないけど好きになれない存在。

その後、次の相川 雄二ゆうじさんの自己紹介を以て今日は解散となった。

「ユキく帰ろうぜ！」

「帰るていうか寮に行くんだけどね」

解散するなりやってきた天音をあしらいつつ、風師さんと香織さんを誘って僕たちは寮に向かった。

第五話

魔導高校というのは基本的に全寮制だ。

これは魔導競技選手になるのならともかく、魔導師の大半の就職先が国防軍や警察など少なくとも初めの内は寮生活を送る場合が非常に多いという理由から。

とはいえ、寮と言っても少し狭い学生向けワンルームマンションのようなもので基本的に一人一部屋が与えられる。月に2回ほどの抜き打ち検査があるけど。

部屋割りとしては1つの学年が一つの寮を使い、下の方の階に男子、上の方の階が女子となり最上階は特例生徒の男女混合階兼予備部屋となっている。

食事は自炊するか、学食を利用するかになる。多くの生徒はパンなどをストックしておいて基本学食、緊急時はそれらという風に行っているらしい。

僕と天音は第二寮の最上階、天城兄妹を挟むように部屋割りされた。無論偶然ではない。

「ユキ〜これは持ってっていいの？」

「うん。その回りの段ボール5個も天音の部屋に置いとこうか」

「りよーかいー、んじや持つてくぜ」

「天音だけなら大丈夫だけど、廊下には他の人もいるんだから横着しないで何回かに分けて運びよーよ」

「わかってるって」

よっこいしよと段ボールを2つ抱えて天音が部屋から出ていく。

二人で話し合った結果、僕の部屋を生活部屋、天音の部屋を作業部屋兼物置にすることになりこうして荷物を仕分けしている。抜き打ち検査が機密保護のために特例で免除されるからできることだよ。やー役得役得。

ちなみに天城兄妹の方はまず妹の方を片すことにしたらしく、僕の隣である兄の部屋は誰もいない。うん、この隙に色々やっとう。

「「かんぱーい！」」

色々とやることも終わり、風師さんと香織さんとともに入学パーティーをすることになった。原因は僕たち、発起人は香織さんだ。最初は学食で夕飯は済まそうと思っていたけど、天音の「久しぶりに鯖しやぶを食べたい」との要望で買い出しへ。

すると本土へ向かう橋の辺りで風師さんたちと遭遇。

よく会うねと話していると、どうやら香織さんが荷物に詰め忘れたものを買いに行くところだったらしい。

そこから天音と香織さんで話が弾み、いつしか部屋でパーティーという流れとなった。

なお、流石に刺身可の鯖は売ってなかったため、豚肉などの普通のしやぶしやぶである。

「それにしても、あのシヨツピングモール大きいね。あそこだけで何でもそろろうじゃん」

食べ始めて少ししたころ、香織さんが橋向こうのシヨツピングモールのことを話し出す。

実際あのシヨツピングモールはそれなりに大きく、入っているテナントも多種多様だった。食料品から薬局、家電量販店、本屋、ファッション、雑貨と言った定番から、変わったものだとアロマ専門店や水専門店なんかもあった。アロマはわかるけど水って・・・

「そうね。ちよつと若者受けしそうなのが多かったけれど」

「まあこの学校の生徒がメインターゲットだろうから、必然的にそうだったんだろうね」

「鯖の刺身はなかったけどな」

「あるわけないでしょ。あれ、相当新鮮じゃないと駄目なんだから。お肉で我慢しなさい。」

少し不服そうにお椀を渡してくる天音に、ちよつどいい感じの肉と野菜をよそいつつ突っ込むと

「へーい」

と気の抜けた返事で受け取り、再び食べはじめた。

そんなことをしていると香織さんサイドでも一悶着やっていた。

「ほら香織、お肉ばかりじゃなくて野菜もきちんと食べなさい。体臭もきつくなるし、ただでさえ貴女はお通じが悪いんだから」

「さーちゃん、ご飯時にそれは汚いよ。それにずっと野菜食べない訳じゃないし、少しぐらいいいじゃん」

「そういう油断が命取りなの。別にお肉を食べるなつて訳じゃないんだから。ほら、椎茸と人参とねぎ。春菊は無いんだから食べられるでしょう?」

「うー・・・さーちゃんお母さんみたい」

「香織が子どもつぽいだけでしよう」

「どこも一緒なようで・・・」

「それに私がお母さんならユキ君はどうなの?」

「なんか話が飛んできた。え?」

「ユキ君はお母さんというよりお嫁さん?なんか甲斐甲斐しく旦那の世話をする新妻って感じ」

新妻かあ。これでも天音との付き合いは長いから、情報庁じゃ若熟年夫婦で言われてたけどそんな風にも見えるんだ。

「ユキは渡さねえぞ!」

「取ったりしないから大丈夫だよ。ユキ君とはお友達としてならいいけど、男女の関係てのはちよつと想像できないもん」

すかさず反応した天音に苦笑しつつ返す香織さん。

僕は気にしないけどそのセリフ、世の男子の多くが言われたら心にクリティカルダメージを喰らいそう。

「僕も正直、天音以外とそんな関係になるのは考えられないかな。ただ、こんな背格好をしてるし僕のこと無意識に異性と認識してないのかもだけど、普通の男子の前でそんなこと言わないようにね?下手したらしばらくふさぎ込むから」

僕のセリフで香織さんもそのセリフの凶暴性に気付いたらしく、「あつ」みたいな顔をしている。

ちなみに今の格好は、普段通りの薄ピンクの浴衣で背もそんなに高くない。メイクも落としてないから大分女顔だし髪型もショートポニー、胸は流石にほとんどないけど十分に性別を誤認させられる自信

がある。

風師さんも香織さんも、僕のことを表層意識じゃ異性だと判断して
るだろうけど、無意識じゃ多分同性に分類してると思う。じゃないと
いくら相手がいると言っても、出会って一日の異性がいる前でこんな
にオープンな会話には普通ならない。はず。

「まあ、そんなことより風師さんと香織さんはなんで魔導高校に？
僕と天音は知り合いが魔導師だからだけだ」

と、そんなことは脇に置いておいて親睦を深めることにしよう。僕
が男女どっちに判断されているかなんてどうでもいいことだし、今は
知れる範囲でお互いのことを知ることのほうが先決でしょ。

「私は元々そんなに魔導高校に興味はなかったのよ。けれど香織が
中2の初めのころからだったかしら？ 毎日のようにここのPVを見
せてきて、『私もこんな風に飛べるかな!』てうるさくてね。まあそう
しているうちに、私も興味が出てきてこれも経験と思って受験した
わ」

「私は小さい頃からデューエル・オブ・スカイ穹穹戦舞が好きだったのと、後はさつきさー
ちやんが言った通りこの学校のPV見て、私も飛んでみたいって気持
ちが大きくなったのが理由かな」

ふむふむ。つまり二人とも、どちらかと言えば競技魔導師志望でこ
とか。

それは良いことなんだけど、正直競技魔導師はキツイところがある
んだよなあ。とりあえず、八校交流戦で成績を残すことが第一目標だ
ろうけど、この代は僕たちがいる理由なんかのせいで魔境と化してる
し。その分、結果を残せば大成すると思うけど。

「てなるとまずは交流戦出場が目標になるのか？ ユキ？」

「普通はそうだけど、二人ともそうなの？」

天音も同じことを考えたらしく、僕に聞く形で二人に確認する。
が、返ってきたのは意外な返答だった。

「いや、私はそこまで交流戦には興味がないわ。試しに校内予選に
は参加するつもりだけだ」

「私もー」

へ？てつきり交流戦で成績を残すのが目標だと思つたのにと、天音と二人して目を白黒させる。

「交流戦じゃないなら他になんかあつたか？二人ともクエストで稼ぐって感じじゃなさそうだが」

「ならなんかあつたか？という天音の問いに、二人はうーん？と悩みました。」

「私はさつき言つた通り、そこまで目的がある訳ではないのよね。交流戦だつて、正直今日の自己紹介の時点で敵いそうにない人が何人かいたし・・・どうしようかしら。というか、香織は交流戦にバリバリ挑む気だつたじゃない。一体どうしたの？」

「いやね？よく考えたら交流戦マギクス・アーツって基本的に術戦闘技であんまりそそられないんだよね。そりゃ、蒼穹戦デユエル・オブ・スカイ舞は術戦闘技出身の選手がほとんどだし、私もまずは交流戦だー！つて思つてたんだけど・・・さーちゃんが言つたみたいに1ーDだけでも凄そうな人が何人もいて、なんか気持ちが悪えちゃつた。やる前から諦めるなんてダメだつてことはわかつてるけど・・・」

あー、はじめる前に主にリストの連中に萎縮してる訳か。

確かに一般の人間が（本来はグレイゾーンだけど）英才教育を受けてきた人間に敵う可能性は、天城護衛対象快人のような例外かよっぽど才能と努力がなければほぼ無いに等しい。それがあから今代は魔境と評した訳だし。

けれど、僕たちにとっては好都合なところもある。まずはそれを確認しよう。

「てことは風師さんも香織さんも入学したはいいけど、現在目標を失つてることOK？」

「その通りだけど、随分とバツサリ言うわね・・・」

「大体そんな感じー」

よし、それじゃあこっちに引き込もう。もちろん、僕たちのことは明かさず二人も一般の範疇に収まるように。

まずはざっとした概要を仮想端末で天音に送る。

直ぐに反応してくれて、内容を見た後「OK」のアイコンタクトを

返してくれた。

二人には少し悪い気もするけど、大部分は朝と同じだしお互いwin-winの関係に持つていけるはずだからそこは割りきろう。ていうか今更か。

「じゃあ俺たちとトレイニングしねえか？」

「トレイニング？」

「うん。僕と天音はさっき言った知り合いに『どうせ魔境高校に行くなら』ていくつか課題を課されたんだ。」

「けど、そいつのいくつかが絶対二人じゃ達成できねえんだわ。多分、コミュ力を鍛えろてことなんだろうが。で、言い方は悪いがちようど仲良くなつて目標もない二人がいるから、それに一緒に挑戦アンドン挑戦のためのトレイニングをしようぜつてお誘いなんだが」

この言葉に香織さんはキョトンとし、風師さんは困惑しているみたい。

まあ、唐突な話だし上手く飲み込めないのもわかる。

ただ、全部が全部ウソというわけじゃない。これからあるだろう色々のために隠れ蓑用の人手が僕たちは欲しい。

けど、その隠れ蓑自体もそれなりの力を持つてないといけない。最初はリストの適当な人にしようかと思つたけど、どうせならその隠れ蓑と親しい方がいい。なら風師さんと香織さんの二人を僕たちで隠れ蓑にできるまで育てようと思つたわけだ。

こっちは隠れ蓑ができる。風師さんたちはそれなりの技術なんかが身に付く、お互いに益のある話になつてると思うんだけど。

「・・・その課題というのは一体どんなものがあるのかしら？」

食いついた！

「僕と天音だけで達成できないものを挙げるなら、クエストラックが小隊でB以上になるとか学年小隊総演で二回以上ベスト5に入るとかかな。あつ後は僕たちが鍛えた人間が交流戦でベスト8に入るつていうのもあるね」

言つてしまえば、これくらいの実績のある人間の近くにいれば何かあつても周囲の納得を得やすいというのが本当だ。別に他のことで

もいいんだけど、やっぱり戦闘系の実績は何かと融通を利かせやすい。

「・・・なんていうか、そのユキちゃんたちの知り合いつてどんな人なの？それがどれだけ難しいか分かってる？伊樹島さんとか私絶対敵わないって自己紹介の時思ったし、水流さんとか私お父さんのファンだから、インタビューで『娘はすごい』て言つてたのを見たことあるよ？他にも凄そうな人いっぱいいたし、他のクラスもいるんだよ？そんな人たちと団体だとしても張り合わなきゃいけないなんて・・・それにユキちゃんたちもどうしてそれをやろうとするの？無理だよ・・・」

「香織がここまで弱音を吐くのも珍しいけど、大筋私も同じ意見よ。そもそも、その課題って達成しなくちゃいけないものなの？」

まあ確かに1―Dは粒リスト者が多いぞろいだろうけど、それはこの二人にも言えると思う。

それが本人が望んでいるものとは違っていたとしても。

「まあ、あのおっさんとはそれなりの付き合いだけど今まで何しても敵ったことがないから、この課題を達成して驚いた顔をさせたいっていうのがやる理由だな。要は意地だ。それにやってやれないことはないと思ってるからな。確かに伊樹島も水流も多分一年じやトツプクラスだろうな。けど、勝てねえことにはないと思うぜ？というよりタイムンでやりあうなら山葵以外なら負ける気がしねえ。山葵は俺が思ってる通りなら勝つのは難しいが」

「どう？どうせこれは僕と天音の問題だから、風師さんと香織さんが何か責任を負うわけじゃないしトレーニングだけでも付き合い合ってみない？僕は二人には、特に香織さんには伊樹島さんを超える才能があると思ってるんだけど」

課題以外、？は言っていない。色々ぼかしてるだけで。

さて、二人のどちらかが乗ってくれれば多分もう一人も乗ってくれるとは思うけど。

「・・・時間が合うときだけでも良いかしら？」

お！風師さんが乗ってくれた。

「もちろん。別に強制するものじゃないしね」

「そりゃ、毎日の方が成果が出るのは早いだろうけど都合つてももあるだろうしな。いつでも歓迎するぜ?」

「じゃあよろしくお願いするわ。香織はどうするの?いつもの貴女ならすぐに飛びつきそうなのに」

風師さんの問いかけに風師さんは俯いて答えた。

「怖い・・・」

「怖い?」

「うん・・・なんて言えばいいのかわからないけど、このままだといけないって気持ちとこれ以上行ったら駄目って気持ちがぐるぐるして・・・なんかこんがらがってきて・・・うう・・・なんなの・・・これ・・・」

そして香織さんが泣き出し、頭を掻きむしりだした・・・ってなんかヤバイ!?

「天音!」

「特に異常なし!受け持つからやってやれ!」

天音のその言葉を受けて、霊機を起動。限定霊機を展開して香織さんに触れる。

流れ込んでくるのは恐怖のみ。けれど、その色は複数あって・・・とりあえず『鎮静』の術式をかけて香織さんの心を穏やかにしてから、『身体走査』と『同調』の術式を使って身心に異常がないか確認していく。

体の方は特に異常なし。心の方は・・・ああ、これが原因か。けど、天音も似たようなものだけど生まれつきこれって凄いな。下手したら僕の2〜3歩手前だよ。けど、これだと僕と天音にも結果だけ見れば落ち度があるね。わかるはずもなかったからどうしようもないし、これを伝えるわけにはいかないけどアフターフォローはしっかりしよう。

「落ち着いた?香織さん」

「う、うん・・・落ち着いたけど何したの?それ、霊機・・・だよね?」

「ただ『鎮静』と念のために『身体走査』の術を使ったただけだから大丈夫。勝手にしたのは謝るけど」

「それはいいんだけど、昔された『鎮静』の術とは感じが違ったようにな・・・」

とりあえず落ち着いたみたいだから霊機を納めて天音の隣に戻る。

「どうだった？」

「今から言うけど、その前に風師さんが何か言いたそう」

僕が離れた後、入れ替わるように香織さんの手を握っていた風師さんが、どこか納得のいかない顔でこちらを見ていた。

「香織を落ち着かせてくれたのはありがとう。この子、昔から偶にこういうことがあって・・・けど、随分と手馴れていたわね。それに今の霊機・・・ユキ、貴方サポートスーツは着てないし制御輪も補助インターフェースもなかったわよね？どういうこと？」

まあ常識に照らし合わせれば当然の疑問だよな。

「朝に言ったけど、天音はある種の持病持ちでね？そのサポートというか緊急時の看護師みたいな立ち位置なのが僕なんだ。手馴れていたのはそのせいで、霊機に関しても一般には非公開の簡易霊機なんだ。この仮想端末の指輪が制御輪も兼ねていて、使える術式も『鎮静』と『身体走査』、『誘眠』だけで今の順にしか使えない代わりに即応性を取ったものなんだ。あ、これはオフレコでお願い。ばれるといろいろ面倒だから」

？だけど。

ただ、本当のことは言えないし言っても信じてもらえないと思うので、今はこれで押し通す。

「そう・・・なの・・・わかったわ。ごめんなさい。本当は話したら駄目だったんでしよう？」

「いいのいいの。それより、やっぱりこうなるの初めてじゃなかったんだ。」

「ええ、一種のパニック障害じゃないかって言われてるんだけど・・・」

それは間違っではないけど正しくもない。

それに僕たちが近くにいる以上、きちんと制御しないと今までよりもこの状態に陥りやすくなる。

「じゃあ香織さんはトレーニングに参加するべきだろうね。良かったね、天音。香織さんは先天性っぽいけど同類だよ」

「先天性の同類ってゆーと…まさか、生まれながらの超直感か？」

「多分ね」

「マジか、渡辺の姉貴以外にもいたのか」

「イギリスとアメリカ、オーストラリアにもいるって話だったけどね」

「あー、二人で納得せずに説明してくれると嬉しいんだけど。私のコレ、何かわかるの？」

「私も同じく説明を求めるわ」

「つといけない。風師さんと香織さんから説明を要求された。」

まあ今までわからなかった自分や友達のことかわかるなら、早く知りたいよね。

つい珍しいから天音と盛り上がっちゃった。

「すまねえ、つい珍しくてな。香織のそれは多分『超直感』てやつだな。さっきのセリフから察するに、おそらく無意識に今のまま諦める未来と俺たちとトレーニングして過ごす未来を感じたんだろうな。そして、そのどちらも今の香織にとって受け入れられるものじゃなかった。結果、それが恐怖という感情になり未来を感じた負荷も合わさって、情緒が著しく不安定になったって感じだと思っただが、ユキ、どうだ？」

「僕の見立ても大体同じ。いやーホント珍しい」

「なんとなく言ってることはわかるのだけど、肝心な説明が抜けるわ」

「超直感ってなに？」

「あーそこが確かに肝心だ。この辺り感覚のずれなのかな？」

「ごめん。超直感っていうのは、要は異能の一つでね？普通の直感っていうのは基本的に今まで経験してきたことや、その時の状況を鑑みて無意識に行う経験則と推測が合わさった根拠の説明できない予測

のことを言う訳だけど、超直感っていうのはその経験則や推測すらない、身も蓋もない言い方をするならそのままなら絶対にその通りになる妄想、ちよつとカツコよく言うなら未来を感じることを言うんだ」

「例えば空を見て「明日雨が降りそう」っていうのは大抵の場合、「なんとなく」と口では言っても無意識にその時五感が感じた情報が過去に翌日雨が降った時の情報に似ているからだだったりするわけだ。無論、無意識な願望のこともあるけどな。これに対して超直感の場合は、例えば鼻歌を歌いながらシャワーを浴びている時に突然「明日雨が降る」と感じる訳だ。そして絶対に雨が降る。これくらいの超直感の持ち主は実はそれなりにいるって言われてんだけど、香織の場合ほぼ最高レベルだろうな。そこまで強い超直感は珍しいもんでな。少なくとも俺は実際にあつたのは香織で二人目だ。制御できれば確定未来視のようなもんになると思うぜ？」

「けれど、今は制御できていないからいつ未来を感じるのかわからないし、得た未来の情報を？も処理しきれていない状態になってる。だから、ある時ふと未来を感じてそれが香織さんにとって受け入れられるものなら表層意識には「何かいいことがありそう」ぐらいなものが浮かび上がるんだけど、逆に受け入れられないものだとさつきみたに一見脈絡のない恐怖感にかられる。更にどれだけ未来を感じたかにもよるけど、当然負荷はある訳でそういうのが重なる時さつきみたいな情緒不安定に陥るってこと。ここまでは大丈夫？」

天音と分担して説明したとはいえ、少し長い説明になってしまったから一旦ここで確認ついでに水を飲む。ついでにドタバタで煮えすぎた野菜を回収しておこうつと。肉は煮えすぎても普通においしいから放置でいっか。

野菜の処理の間の対応は天音、任せた！

「私のこれってそんなものだったんだ・・・言われてみれば結構思い当たることがあるかも」

「香織、感心は後でもできるでしょう。今は情報の整理が先よ。えーとつまり、香織が今まであんなふうになってた理由は、その超直感を制御できていないがための暴走のようなものだったということ

でいいのかしら?」

「ああ、それで合ってるぜ」

「超直感は香織くらい強いのは珍しいもので、だから今まで原因がわからなかったと」

「だろうな。ついでに言えば、異能系があまり認知されてないのも要因の一つだと思う。研究は結構されてるんだが」

うーん。結構煮えちゃってるし、良さそうなのはこっちの鍋に移してもうおじやにしちやおうか。卵、卵・・・

「なら、何故トレーニングに参加した方がいいのかしら? 暴走したということは、香織にとって受け入れられない未来を感じたということでしょうか?」

「確かにそうだが、トレーニングに参加しない未来も受け入れられなかったということも忘れないでくれよ? 普通一つの未来しか感じていなければ、暴走なんて滅多にしない筈なんだからな? で、トレーニングに参加した方がいい理由なんて、んなもんそっちも分かっているだろ」

「整理だもの。一応ね。」

「天音ちゃんも超直感の持ち主だから、だよな?」

「正解。異能系は魔力の多い環境じゃ活性化して暴発することが何故が多い。魔導高校に通う以上、嫌でも魔力の多い環境にいることになるし、いつまた暴走するかわかったもんじゃない。それにあの感覚は香織も嫌だろ? 他の異能系ならともかく超直感なら制御を教えられるし、そう悪い話じゃないと思うけどな?」

ご飯は・・・ちよつと少ないかな? チンするご飯を足せばいいか。よしよつと、須藤のご飯はもっちもちよつとあれ? 切り餅だったっけ?」

「そうね。悪い話じゃないわ。けれど、『トレーニングに参加した未来を受け入れられなかった』この事実が私を不安にさせるのよ。私は香織の保護者じゃないし最終的に決めるのは香織だけれど、香織の友達としてやっぱり香織の苦しむ姿は見たくないのよ」

「さーちゃん・・・」

「同じ超直感持ちとはいえ香織がどんな未来を感じたのか、そこは俺もわからねえ。けどな、その未来はそのままなら、だ。さつき香織が感じたみたいに、未来ってのは選択次第で変わるもんだ。なら、香織が受け入れられるような未来に行きつくようにこれから選択すればいいと思うけどな。それに、今の香織が受け入れられないからと言って、未来の香織もその現状に不満があるとは限らねえだろ」

「天音ちゃん……うん！決めた！私もそのトレーニングに参加する！」

「それでいいの？香織。なんか今、答えを出さなくちゃいけないみたいな雰囲気にはしちやっただけれど、別に今は保留して後で決めてもいいんじゃない？」

「そうだぜ？別にこっちは強制はしねえ。超直感のせいでややこしくなってるけど、元々は俺とユキのわがままみたいなもんだし今日はこのままメシ食べて帰って、また明日とか明後日とかに決めてくれても「いいの！私、今日いろんなことがあって小さい頃さーちゃんと約束したこと忘れてた。私馬鹿で一度悩むと長いから、とにかくやらないうで後悔するよりやって後悔すること。代わりにさーちゃんが色々考えて私をフォローすること。へへっそうだよ！最初っから悩む必要なんてなかったよ！ごめんね！さーちゃん、天音ちゃん、ユキちゃん……ん？あれ？ユキちゃんは？」ん？気付いてなかったのか？まあすぐ「♪♪♪」戻ってくるさ」

「そんな昔のことよく覚えていたわねって思っていたのに何かしら。このそうじゃないという感覚は……」

温まったご飯を持って戻ってみると、風師さんと香織さんから視線を向けられた。なんで？

「天音、お疲れ。すぐにおじやにするから待ってね。風師さんと香織さんもおじやでいい？うどん派だったりしない？」

「別にいいけれど、それよりユキ？あえて無視してたけれど、貴方途中から鍋の整理を始めるんじゃないわよ……まあ有難かったけれども……」

「あ！お肉がお皿によそられてる！ユキちゃんありがとう！」

「最初は煮えすぎた野菜を整理するだけのつもりだったんだけどね？ どうせなら波長が合う天音に任せちゃおうと思っ」

了承も得られたので、スープの中にご飯を投入。ほぐしたら溶き卵を入れて少しかき混ぜ1分くらい蓋をする。

「ねえユキ？ 少し作りすぎじゃないかしら？ 私そんなに食べられないわよ？」

「私も正直・・・」

「どうせ天音が食べるから大丈夫。とりあえず話は聞いていたけど、二人ともトレーニングに参加するってことでいいんだよね？」

「うん！」

「ええ。ってそんなに食べるの？ 天音って」

何故か風師さんが少し引いてるけど、鍋一つ分ぐらいなら天音にとつて本当にメに軽くレベルなんだよね。

「？ それぐらい普通だろ？ ユキはともかく風師も香織も少食だなあ」

「天音が健啖家なだけだと思うわよ」

「すごいねー」

「そうか？ 知り合いは皆これくらい普通なんだけどな・・・」

まあ、魔導師は皆よく食べるようになるからね。

多分風師さんも香織さんも、卒業する頃には今の数倍は食べるようになると思う。

つと、そろそろいいかな？・・・うん！ いい感じの卵の固まり具合。全員の腕によそって渡していく。

「足りなかったら各自でお代わりしてね。とりあえずトレーニングは明日の放課後からやろうと思ってるけど、学校のクラブ活動とかでどの場所がいいかわからないからまずは場所探しにうろつこうと思うけど大丈夫？」

「わかったわ」

「問題ないよー！」

良かった。ここで「ごめんなさい。ちよつと用事が・・・」とか言われるとダメージ大きかったからね。

「それじゃ、そういうことで。風師さん、香織さん改めてわがまま聞
いてくれてありがとう」

「これからよろしくな」

「「ちち」」

この後一時間ぐらい騒いだからお開きになった。

第六話

なんだかんだ色々あった昨日から一夜明け、現在時刻は8時10分。

仁徳学園は8時50分からホームルームで、寮からは教室まで10分ほどののでまだまだ余裕がある。

朝食を食べ終えて本当ならちよつとしたダラダラタイムなんだけど、今朝はやることがあるので結構バタバタしている。

「R1番からR22番まで問題なくオンラインだぜ！」

「じゃあ、学園の警備システムの掌握お願い。あ、霊機的位置情報管理システムの傍受もできればお願い。勿論優先順位は対象、リスト者の順ね。コードは学園が5番、霊機が2番」

「任された。そつちはまだかかりそうなのか？」

「ううん。後はナマコ型のちよつとした調整と監視ネットワークと同期して繋げるだけだから、あと5分もあれば終わるよ」

予め調査部が設置していた監視機器と新たに追加する機器の状況確認。それと学園や行政の防犯システムに侵入してなにをやっているのかと言えば護衛対象を中心とした監視ネットワークの構築。

いくらなんでも、僕たちが護衛対象に四六時中張り付いておくのは現実的じゃない。

対象に僕たちのことは伝わっていない以上、こちらに配慮した行動をとるなんてありえないしこつちも突発的な事象がないとも限らない、ついでに僕たちも私的な時間は欲しい。

ならどうするか。対象を中心に監視ネットワークを構築して、なにかあればすぐに察知できるようにすればいい。

とはいえ昨日の時点で対象の部屋に関しては完成していて、今朝やっているのは偽装監視ドローンの設置と極薄シール型発信機の調整、そして各種システムをつなぎ合わせることで学園島とその周辺をカバーする監視警戒網の設定だ。

調査部が事前にパッケージングしてくれているので、僕たちはマニュアルに沿って弄るだけでいいからとても楽。調査部の皆さん、技

席に着くと、すでに登校していた二人に挨拶をされた。天音と香織さんは席が隣な上僕も天音の右後ろなので席が近い。結果、まだ二日目でも仲良しグループとしてあいさつを交わしあっても不思議な光景ではない。

「昨日はご馳走様！けど、ほんと天音ちゃんの食べっぷりは凄かったよね」

「まだ言ってるのか。あれぐらい魔導師なら普通だつてーの。そのうち香織もあれぐらい食べるようになるんだよ」

「えー！嘘だあ」

「魔導師は燃費が悪いから、普通の量じゃその内足りなくなってくるよ。学食にも大盛系のメニューが多かったでしょ？あれもそういう理由からだよ」

「良かったじゃない香織。これからはダイエットを気にせずに食べられるわよ」

「あ、そっか！燃費が悪いってことは、すぐにカロリーが消費されるってことだもんね！じゃあケーキとかいっぱい食べても平気なんだ！」

「カロリーはそうだけど、きちんと管理しないと糖尿病や虫歯になるからスイーツ系はほどほどにね」

「ついでに言えばきちん和马ッサージなんかで育乳しねえと、俺みてえにまっ平らになるぞ？俺と同じで胸なんて邪魔だと思ってるなら別にいいだろうけどな」

「流石霧谷さんや渡辺さんの忠告を無視し続けたAAカップ。重みが違う」

「そんじょそこらと比べてもらっちゃ困るぜ！はっはっはっ！」

「・・・さーちゃん、おっぱいが大きくなるマッサージって知ってる？」

「・・・女性雑誌に載っているものぐらいなら・・・ね。諦めずに頑張らしましょう・・・」

「うん・・・」

そんな感じの雑談をしつつ、対象の方を何度か確認するけど接触で

きそうなタイミングがない。

こりや、朝は無理そうかな。

キーンコーンカーンコーン

「全員席に着け。これより朝のSHRを始める」

チャイムと同時に教室に入ってくる荒木先生。

絶対に少し前からスタンバってたでしょ。

教壇の上に立ち、教室を軽く見渡した荒木先生は満足そうに口を開いた。

「よし、全員出席しているな。二日目から無断欠席する者はいないとは思っていたが、実際に確認するとやはりホツとするものがあるな」

それは最早なせ入学したのレベルではないでしょうか。いや、僕が言えた義理じゃないけれども。

「では、本日の予定から伝える。とは言ってもそんなに複雑なわけではないが。まず、このあと教室でガイダンスを行う。その後八校交流戦の当校に関する説明を行い、後はクラス長なんかの各種決め事が終われば本日は解散だ。もつとも、午後からは生徒会と部活連合会による部活動説明会がある。強制ではないが、まあ行っておいた方が無難だろうな。ここまでで何か質問はあるか？」

別に疑問を覚えるほど深い内容がある訳でもないしまだ二日目。ここで質問なんて目立つ真似する人間がいるは？「はい」え？いるの？

「ほう？私もそこまで教員生活が長いわけではないが、ここで質問されるのは初めてだな。なんだ？明嵐」

荒木先生から指名されて立ち上がる明嵐さん。

一体何を聞くんだろ。

「いやまあ、素朴な疑問なんですけど、普通ガイダンスなんて講堂や体育館なんかで行うイメージがあるのでなんでなのかと思ひまして」
そうなのか？

「ふむ。確かに以前はそうのようにしていたこともあったらしいが、

今は生徒が質問しやすくして理解を深めてもらうことや、あとは単純にこちらの手間だということから教室で行っているらしいな。ちなみに蛇足だが、生徒会と一部のボランティア生徒以外の在校生は今日が一学期初日だ。これから体育館では始業式が行われる。これでもいいか？明嵐」

「はい。ありがとうございます」

納得したようで着席する明嵐さん。

へー、在校生は今日が始業式なのか。

そういえば昨日は部活動なんかを見かけなかったけど、もう授業が始まっていたわけではなくて単純にやっていなかっただけか。

「いや、少し驚いたが疑問に思ったこと、わからないことを質問するのは良いことだ。他の者も明嵐を見習うように。こちらも答えられるものには答えよう。他に何かある者は？」

再び荒木先生が尋ねるが、今度は誰もいない。

「無いようならば、これでSHRを終了する。ガイダンスは9時から始めるので遅刻しないように。では解散」

その言葉とともに、それなりの生徒が明嵐さんのところへ向かって行く。

聞こえてくるのは「勇気あるな！明嵐！」や「俺、小賀野っていうんだ。よろしくな！」など、どうやら交友関係を持ちに行ったらしい。

「人気だね。明嵐さん」

「ああ、ありやこれで一つのヤマ張るだろうぜ」

と言っても僕たちのように交友関係を広めるつもりのない人間もいるわけで、天音と香織さんのところに僕と風師さんは集まる。

「すごいね、明嵐君。あつという間に人気者だよ」

「言われてみれば、確かに疑問にはなるけれども普通はそういうものだと流すものよ。それをまだ二日目皆緊張している中で尋ねるんだもの。注目を集めるなんて言うまでもないのにできるなんて、彼、よっぽどメンタルが強いよね。」

「意識せずにやったんなら、天然か生来のムードメーカー。意識してやったんなら大した腕前だ」

「まあ、明嵐工業の創業者一族の人だしどっちでも納得はできるよね」

と、対象の周りに人がいなくなった。チャンス！

「ごめん、ちよつとお手洗い行ってくる」

天音に「決行」とアイコンタクトで伝えると

「おう。行ってらー」

「了解」と返ってきた。

ポケットのハンカチを確かめるようにして手に仕込むのは、今朝準備した極薄シール型発信機。

普通に教室を出ようとして、対象の前で突然足がもたついたようにずっこける！うっ・・・顔痛い・・・

「おい！大丈夫か！って君は確か・・・」

作戦第一段階成功。

こうすれば正義感の強い性格の彼なら、まず間違いなく駆け寄ってくる。

別に周りに誰がいる状況でもいいんだけど、それだと彼が一番最初に駆け寄ってくるかは微妙なところ。

なのでできるだけ対象一人の時が良かったんだけど・・・これも人を集めてくれた明嵐さんのおかげかな？明嵐さんグッジョブ！

「イテテ・・・ありがとう。新しいスリッパだからまだ履きなれてなくて・・・」

そして差し出された右手の手首を掴む！

結果、掌に仕込んだ発信機は対象の手首に張り付き作戦成功。

あとは「あ、ごめん」と手を掴みなおして普通に起こしてもらおう。うん。きちんと掌からはがれてるね。

「えーと、天城さん・・・でいいよね？寮でお隣の」

「ああ、天城 快人。義妹と被るから快人でいいぜ。君は紫乃宮君・・・であってるよな？」

「うん。紫乃宮 悠希。寮の部屋も隣だし、これも何かの縁だね。よろしく・・・あ、ごめん。トイレに行くところだったんだ！このお礼はまた今度！」

「あ、ああ。気をつけるよ」

少し強引に会話を打ち切って、トイレに向かって小走り。

トイレに着いたら個室に入って、きちんと起動しているか確認する。・・・うん！ちゃんと位置情報が届いている。

今回、対象^彼に着けた発信機は技術研究部謹製で皮膚の表面に張り付けば、ほぼ違和感を感じさせない。耐水性も粘着性も高くて普通に生活していれば二年ほどは引っ付いていて、更に監視ネットワークが完成したこの学園島内なら三次元的に居場所がわかる優れもの。

これで学園島内なら何処にいても、なにかあれば駆け付けられる。やったね！

一番いいのは首筋だけど、今は難しいので次善の手首に着けることにした。

違和感なく接触できるのはやっぱり相手の掌だったけど、違和感が生じやすいし剥がれやすくもあるからダメなんだよね。

水を流して手を洗い、教室に戻ると天音が

「おう、お帰り。どうだった？」

と聞いてきた。

「うん。スツキリした」

「さよけ」

これは単純な符号で、お互い「成否は？」「成功」の意を持っている。ちなみに失敗だと「キレが悪かった」だったりした。

「ユキちゃん、結構思いつ切り転んでたけど大丈夫？」

「顔面から行ってたし、鼻骨とか折れてないかしら？」

「トイレでこっそり『身体走査』使って診てみたけど大丈夫だった。

まあ、少し痛いけどね」

「そう。ならいいけれど」

「便利だよねー」

「本当はダメなんだけどね」

そんな感じでいると、何やら荷物を持って「ガイドダンスを始める。席に着け」と荒木先生が戻ってきた。

その言葉で僕たちは解散し、明嵐さんのところも各自の席に戻って

いった。

「それではガイダンスを始める。まずは資料を配るので前から後ろに回すように」

そう言って配られたのは『2080年度ガイダンス』と印刷されたA4サイズのプリント6枚からなる小冊子だった。

「今時紙の資料と思う者もいるかもしれないが、教育現場ではプリントというのは生徒がきちんと見ているかを確認するうえで有用なんだ。終われば捨てるなりスキャンして端末に取り込むなり好きにしているが、今はこれを見ろ」

義務教育のほとんどを情報庁の家庭教師で済ませた僕と天音は普通の小中学校をほとんど知らないけど、今の時代ペーパーレス化が進み授業の資料などはデータで生徒の教育端末に送ることがほとんどらしい。実際、この学校の生徒手帳も端末にダークウェブにあるこの学校の専用サイトからアプリをダウンロードするシステムで、渡されるのはIDと初期パスワード、サイトのURLだけだった。

そんなご時世に紙の資料は確かに珍しい。情報庁じや機密の関係上、手書きの紙資料なんかもあったけど。

「改めて入学おめでとう諸君。我々仁徳学園教職員一同は君たちの入学を心から歓迎する。さて、ガイダンスの前に確認だが、全員生徒アプリはインストールしたな？まだの者は時間をやるから今すぐインストールしろ」

ここで言葉を切り、教室を見渡す荒木先生。

僕は前の方の席だからあまりクラスのこととは見えないけど、見た限りではそんな操作をし始める者はいない。

「全員インストールしているな？ではインストールしていることを前提にここから話す。資料のページを開け」

言われた通り開いてみると、そこには生徒アプリの様々な機能が説明されていた。

だから確認か。

「そこに書いてある通り、生徒アプリは生徒手帳、連絡網、成績簿、学内における財布などを兼ねたアプリだ。そのためなりすましなど

を防ぐために一度ログインすれば端末のSSIDとも紐づけされるから、端末を変える際は必ず学校に申告するように。生徒間のSNS機能もあるが、基本的に学校側も確認することができるから、学校にバレたくない話は別のものできるように。過去にこれでカンニングをしようとしてバレた馬鹿がいてな？学校としては非常に助かるが、諸君としては嫌だろう。無論、カンニング行為は発覚した時点で未遂だろうと厳罰対象だ。もしやるなら覚悟を持ってするように」

するなどは言わないあたり荒木先生、過去にやったことがありそうだな。

「次に任務ポイントについてだ。二ページ目を見ろ」

二ページ目に書かれているのは魔導高校独自のシステム。任務についてだ。

「これに関しては八校交流戦と同じくらい有名なものだから、諸君らも退屈に感じるかもしれないが大切なことなのできちんと確認するように」

これも過去にやらかした人がいたのかな？

「まず任務に関してだが、基本的に小隊で受注し行っていくことになる。そして、その任務に応じたポイントが小隊任務ポイントとして加算され、一定のポイントで次のランクへの昇格試験の挑戦資格が与えられそれに合格すれば上のランクへ昇格できる。ランクについてはEから順に上がっていき、最高はSランクとなる、上のランクになればなるほど、正直個人としてはあまり賛同できないが危険な任務が多い。代わりに上のランクであればあるほど、卒業時の評価としては外部からも高く評価されるため、その後の人生で有利に働くだろうし学校としても様々な優遇措置も受けられる。」

実際今まで死者こそ出たことはないが、重傷者はそれなりの人数が出ている。世間の評価も賛否両論で、中には廃止にすべきだとの声もある。それでも生徒側から非難の声が出ないのは、嫌なら受けなければいいということが一つ。もう一つは・・・

「次は諸君が気になる個人ポイントの話だな」

これがあるからだ。

「個人ポイントは小隊任務ポイントとは別に個人に与えられるポイントで、校内であればIポイント一円として学食や売店で使用できる。また、結構な量のポイントが必要だが赤点などの成績の穴埋めにも使えないことはない。もともと、赤点をこのシステムで補填したのもなど私は今まで二人しか見たことがないがな」

魔導高校の売店というのは、品ぞろえは普通の学校の売店とあまり変わらないけれど注文すれば結構いろいろなものが買える。むろん手数料は発生するけど。

そのため、それなりのものを買って転売することで現金化して一財産築くものもいる。

確か過去には卒業時に三百万ほど貯金していた者もいたらしい。

「改めて言うておくが、小隊任務ポイントと個人ポイントは別のものだ。混合しないように。小隊に関しては四フォー人マンセル・ワンユニット一組であれば基本的に問題ないが、いくつか例外事項があるので何かあれば相談するように。まあ、他学年と組むことなどほぼほぼないだろうが、一応組めなくはないと言っておく」

その後は履修教科やシラバス、授業の心得、定期考査に長期休暇などでの外泊許可の取り方、学校施設の紹介などらしいものが続いていた。

「では、次に八校交流戦について説明する。これが終われば一旦休憩にするのもう少し頑張るように」

八校交流戦。

僕と天音以外にとっては、注目のイベントの一つだろう。いや、僕たちにとっても別の意味で注目のイベントなんだけど。

「八校交流戦とは毎年夏の長期休暇中に開催される全国八つの魔導高校、我が仁徳学園、義徳学園、礼徳学園、智徳学園、忠徳学園、信徳学園、孝徳学園、悌徳学園の代表生徒各五名の計四十人でトーナメント戦を行い、優勝者には八行王の称号が授与される。八行王の称号は名誉だけでなく、その生徒の評価に大きく加算されるので毎年激しい戦いが繰り広げられるな。無論、優勝できずとも本線トーナメントに出場した。ベスト4だったなどでも評価されるがな。ただし、よく

勘違いされるが評価に加算であって成績に加算ではないのでそこは間違えないように」

あくまで評定的な加算であって、学業成績には一切反映しないということですね。

「代表生徒の選出方法は各魔導高校によって多少異なるが、我が校では希望生徒全員による総当たり戦を行い上位五名を代表生徒とすることになっている。・・・この運営は毎年大変だな。正直適当に五つのグループに分けてバトルロイヤルでもさせて、その勝者5名でいいんじゃないかと個人的には思うんだが諸君はどう思う？」

この荒木先生のセリフにはどこか悲壮感が漂っていて、クラスの多くが苦笑いを浮かべたんじゃないかな？僕は浮かべた。

「・・・話を戻そう。この希望に関しては仁徳学園の生徒であれば一切の差別はしない。総当たり戦に関してもだ。正直、夏という時期に本戦がある以上、校内予選に関しては圧倒的に新入生が不利だ。しかし、だからといって参加しなければ絶対に本戦には出ることなどできず、また参加した者との経験の差というものが大きく開いてしまう。なので諸君らにはこれも経験の一つとして参加することを、私は強く薦める。無論、何らかの理由により参加できないという者もいるだろうから強制はせんし、運営する側としては数が減ってくれた方がありがたいのだが」

なんか教師としての顔と組織の人間としての悲哀が混ざったはなしになってる・・・

まあ、僕と天音は面倒なのと、下手に戦って何か感付かれるとうつとうしいから参加しない選択肢しかないけどね。

「ルールについては本戦、予選ともに標準的な一対一での術戦闘技マギクス・アーツだ。参加希望生徒は4月14日までに生徒アプリから希望の意を表明するように。期日が短いけど、こうでもせんと毎年ほぼ全校生徒が参加するせいで日程が追い付かんだ」

確かにほぼ全校生徒で総当たりをするととなると、ただでさえ莫大な日数がかかる上に定期考査や各学年のイベント・・・僕たち一年生なら宿泊研修という名の生徒の親睦を深めるための二泊三日のイベン

トがある。

できるだけ早くから始めなければ絶対に間に合わないだろうね。コレ。

「では、ここままで何か質問んおある者は？なければこのまま一時休憩とするが」

「ハイ」

それに答えるように・・・おそらく最初から聞こうと思っていたんだろう声が上がった。

「水流」

「ハイ。交流戦に関してですが、霊機は学園の貸し出しのみでしょうか？それとも個人所有の霊機を使ってもよいのでしょうか？」

「どちらでも構わん。どうせ学生レベルの、それも限定霊機のみでの戦いだ。完全霊機ならともかく貸し出しだろうと専用機だろうと誤差のレベルでしか変わらん」

「わかりました。ありがとうございます」

「他に何かある者は？」

今度は誰も声も手も上げない。

「まあ、何か気になることが見つかったらあとで個人的にでも質問に來い。ではこれより一旦休憩とする。再開はそうだな。この時計で10時30分からの13分間とする。では解散」

こうしてガイダンスは終わった。

けれど、この後の係り決めでちょっとした騒動があることは、この時誰も知らなかった。

第七話

荒木先生の解散の宣言で、クラスメイトはいくつか分散したグループに分かれていった。

僕、天音、風師さん、香織さんのような少人数の仲良しグループが3つほどと、先ほどの明嵐さんを中心とした10人ぐらいのグループ、その他少なくともこのクラスのグループにまだ属していない、或いは属す気がないグループ。

大きく分ければこんなところで、まだ完全に決まりというわけでもないけどいつメンと言うものが早くも形成されつつある。

玲奈さんから「小規模で良いから何処かのグループに属してないと、学生生活って厳しいわよ」って忠告されていたけど、早めにグループを作れて良かった・・・

「校内予選って厳しいんだろうなーては思ってたけど、まさかほぼ全校生徒で総当たり戦だとは思わなかったよ」

「毎年本戦はどの学校もほぼ三年生、たまに数人二年生がいる程度だったけれども、純粋に実力で決めるならそうなるわよね。まず、新入生が敵う相手じゃないわ」

集まった僕たちの話題は、さっきの交流戦のことについてになっていた。

「けど、専用機を持っているなら使っていっていいものには驚いたな。荒木先生はああ言ったけど実際不公平だと私は思うな。専用機なんて誰でも持つてる訳じゃないだし」

「て言っても荒木先生の言ってることも間違いではないと思うよ？ 実戦なら限定霊機のみだろうと専用機、またはほぼそれに近づけるレベルでセッティングしないと致命的な差を産み出しかねないけど、学生レベルでそれが起こることなんてほとんどないだろうし。それに本戦にでるような人なら自分のセッティングデータぐらいは持っているだろうし調整もできるでしょ」

「なら、ユキは誤差でしかないというの？」

「多少有利にはなるだろうけどね。けど、結局は経験の差がものを

いうと思う。たまにそれを覆す圧倒的な才能を持つ人もいるけど、それは例外だし」

「まあ結論、新生はまず本選に出ることは想定されてねえんだし、専用機があるうがなからうが大番狂わせなんてまず起こらねえって学校は思ってたんだろ。んでもって、新生の中での序列にもそんなに関係はないだろうってな」

その通りだけど、もうちよつとオブラートに包もうよ。天音。

「それじゃあ、昨日の貴方たちの課題は来年以降に持ち越しかしら？」

香織さんの「専用機持ちズルくない？」問題に対する僕と天音なりの見解を聞いていた風師さんが「じゃあ」って感じで聞いてきた。そんなことある訳ないじゃん。

「んなことはねえぜ。二人には今年から本戦トーナメントベスト8を目指して貰う。最低でも本戦出場だな」

「えっ？けどさつき無理って……」

困惑した感じの香織さん。

確かに専用機があつてもそんなに差は縮まらないって言ったのに本戦出場を目指すというのは一見矛盾してるかもしれない。

けど、実のところ簡単な話だったりするんだよね。

「それは普通ならの話だ。新生に足りてないのは圧倒的に経験値だ。特に香織や風師のような一般出はな。なら、上級生に匹敵する……いや、上回る経験を積めばいい。そういうのはユキが得意な領分だ」

そう。上級生と下級生の間に大きく広がっているのは経験値。そこを埋めなければまずスペックの差はどんどん小さくなる。特に技量がものをいうこの世界では。

なら話は簡単で、その経験の差を埋めてしまえばいい。

実時間的な短期錬成

幸いそういうのは仕事の一つだったから、やり方はよくわかってることだし。

「そういうのは得意って、一体何をされるのかしら……」

「それは後のお楽しみだよ。少なくとも直接的には身体に傷は付か

ないから」

「直接的でなければ傷つくのね。今から不安だわ・・・」

「が、頑張ろう？さーちゃん」

そんなに怖がらずとも、新卒の新人に行く研修をマイルドにするだけだから多分堪えられると思うけど。

あ、そういえば今年から僕たちが居ないから、しばらく昔の研修に戻すって長官が言ってたような・・・脱落者が出なければいいけど。

「とりあえずその辺りの話は後でいくらでもすることになるから、今はこの後の係り決めの話しない？」

このまま放って置くと長くなりそうだから、一旦話を変えよう。どうせ後で嫌になるほどする話だし。

「俺は係なんて面倒だからやりたくねえ」

うん。だよ。僕も同意。

「私はあるなら保健委員なんてやってみたいな」

「香織じゃ保健室で使うもの間違えたりしそうだからダメね」

「さーちゃんひどい!?じゃあさーちゃんは万年委員長だしまたやるんでしょ?」

香織さんが保険委員・・・元氣はもらえそう。

風師さんはイメージ通りって感じだな。

「今までは成り手が居なくて話が進まないからやってただけよ。見た感じこのクラスは立候補しそうな人が何人かいるし、全員何かしらものに就かなくてはいけないって訳じゃないならなにもしないわ」と思ったらそんなわけじゃないみたい。

けどなんだかんだきちんとやってたそうなのがする。

「えー、さーちゃんが委員長じゃないなんてなんか違和感ある」

「したくてやってた訳じゃないし、しなくていいならしないわよ。ユキはどうなの?」

「僕も絶対じゃない限りなにもする気はないよ。絶対なら図書委員とかかなあ」

または対象が行う係か、だね。

「それではまず、決めなければならぬ係の事を説明する」

やはり鐘と同時に教室に入ってきた荒木先生は、全員揃っていることを確認したあと、単刀直入と言わんばかりに話を進めた。

続きという意識と、荒木先生としても多少慣れてきたからだろう。「まず決めなければならぬのはクラス長だ。クラス長というのは要は学級委員長のようなものだ。クラスな代表として学年でのイベントなどでの運営補佐、教師目線では分かりづらい生徒としての意見の集約、生徒会や本部長会議への出席等々、様々な事を行う。体のいい便利屋とも言えなくもないが、それはそれとして大事な役職だ。他と比べて明らかに負担が大きいため、評価されるのとは別に個人ポイントに就いている間は毎月300ポイント加算される。他にも細々したことがあるが、それは後で自分で確認するかこの後質問するように。他の係の説明もしなくてはいけないからな」

つまり、クラス長というのは大変な代わりに色々の特典があることで、その代表的なのが評価と300ポイントということか。

一月300円というのはタダ働き同然と見るべきか、学校から300円貰えるというのを凄いと言うべきか迷うな。

「次に各委員会だな。基本的には各委員会からの通達事項の通達、委員会本部の補佐が仕事になるがお互いが了承すれば本部員になることもある。その時は各委員会本部で説明をされるだろうが、そうだな、軽く本部員の説明もしよう。委員会はガイダンスでも少し話したが、保健委員会、風紀委員会、図書委員会、環境委員会、監査委員会の計5委員会があり、各本部長5名と生徒会で本部長会議を開き運営されている。少し違うが生徒会が政治家、本部長が官僚とでもイメージすればいい。本部員はその本部長の元で動く役人だな。例えば風紀委員ならクラスの風紀委員は月2の寮の抜き打ち検査の結果などをクラスメイトに伝えるといったことが仕事だが、本部員は校内、寮、教師同伴の元で学園島の巡回、校則違反者への注意または学校側への報告などを行う。このように仕事内容が違うため、クラスの委員と本

部員は制度上は兼任できるが基本的に本部員になればクラスの委員は辞任というのが通例となっている」

兼任をすると同じ委員でもやることが違い、更に運営側に近いとなれば特に風紀委員や監査委員は何かあった時に差別を他のクラス委員から疑われかねない。

故にできるだけ兼任はさせず、クラスの委員と本部には明確な線引きを最低限している。ってことでいいのかな？

「少し話が脱線したが、今はこの五つの委員を決めるということぐらいは分かるな？他には体育祭実行役員と文化祭実行役員を各二名ずつ、合計で10名の係を決める。基本的には立候補、それで埋まらなければくじ引きで決めることにする。他薦はされた側がゴネる可能性があるからな。最初からくじ引きの方が諦めも付くだろう。では、何か質問はあるか？」

「はい」

「伊樹島」

「二つの役職に複数名の立候補があつた場合は？」

「他の候補者に引くように説得し。それでも決着が着かなければじゃんけん・・・いや、双方が納得するならという条件をクリアするなら決闘で決めることも許可する」

「決闘」

その言葉にクラスがざわめく。

「荒木教諭、決闘とはどのようなもののですか？」

それは伊樹島さんも例外では・・・あつたみたい。

何故なら顔には困惑ではなく、わかりきつたことを聞かなければならない不満と呆れを浮かばせているから。

多分、両親が従姉辺りから聞いていたんだろうね。恐らく他にも・・・主にリスト組は似たような表情を浮かべていると思う。

まあ、魔導師の間で広がったローカルルールみたいなものだし関係者に魔導師がいる人なら知っていることではあるけど、そんな顔しなくてもいいんじゃないかなあ。一般の人が知ってるはずないんだし。

「ああ、すまん。私もとっさに思い付いたものでな。新入生の諸君

で魔導師の文化など知っているものはあまりいないというのに、すまない。だが、伊樹島？お前はどうかやら知っていきそうな顔をしているな。どうせだ。お前が説明してみろ」

そういう荒木先生の顔は謝っているときは真剣な顔をしていたけど、今は伊樹島さんと他数名に対して悪そうな笑みを送っている。きつと「お前らのアドバンテージなど意味はない。今回は伊樹島だが、他の者も今後そのような態度を見せれば覚悟しておけ」て感じのメッセージなんだろう。

もつとも、それをきちんと受け手が理解できているかは別問題なわけ・・・

「わかりました。では、荒木教諭に代わって説明します。決闘とは魔導師の間でいつのころから始まった揉め事を解決するための手段の一つです。お互いに意見が平行線をたどった場合などに、お互いに条件を決めて戦い勝者の意見を尊重するというものです。基本的には術戦闘技マギクス・アーツですが、挑まれた方に決闘の可否も含め優先権があるため様々な派生ルールがあります。これでいいでしょうか」

「あ、ああ。大丈夫だ。少し補足をするなら、お互いに対等だと認めたまものを賭けて行うこともある。勿論、お互いが認めたからと言って退学や立場、成績などを賭けることは学校として認めていないのでそのつもりでな。立場については例外もあるが、それは今回のように学側が認知しているもののみだ。ご苦労だったな。伊樹島」

「ありがとうございます」

そう言って着席する伊樹島さんだったが、多分荒木先生の笑みの意味には気づいてないんだろうなあ。

じゃなきゃあんな自信に満ちた回答はしないだろうし、それで荒木先生も呆気にとられた感じになってたんだろうし。

なんか面倒なことになりそうだなあ。

「今の伊樹島の説明の通り、決闘は魔導師の譲歩条件の一つだ。ただの模擬戦より何かか懸かっていた方が成果が出やすいだろう。今の時期ならどんぐりの背比べだしな。ということで、立候補がダブった場合でお互いが了承するなら術戦闘技マギクス・アーツの勝敗で決着をつけても構

わん。では早速立候補を募ろう。まずはクラス長からだ。誰かなりたい奴はいるか？」

この言葉とともに、荒木先生の後ろにある黒板―のように見えるデイスプレイに『クラス長』『保険委員』『風紀委員』『図書委員』『環境委員』『監査委員』『体育祭実行役員』『文化祭実行役員』の文字が浮かび上がった。

さて、だれか立候補するのかな？伊樹島さんと明嵐さんは立候補しただけ、はたして。

「はい！」

結果は伊樹島さんと対象^{快人君}。

って対象!?明嵐さんじゃなくて!?

「ふむ、天城に伊樹島か。他には？」

『クラス長』の下に「天城 快人』『伊樹島 凜』の文字が浮かび上がり、他の立候補者がいないか荒木先生が確認するが他に声をあげる者はいない。

・・・どうでもいいけど、今なんの操作もなく二人の名前が浮かび上がったのって音声操作？それともコンタクトレンズ型の網膜端末？後で聞いてみよう。

―閑話休題―

まさか明嵐さんじゃなくて対象^{快人君}が立候補するなんて、一体なんで立候補したのやら。

正直、何にも係に就かないことがこっちとしては一番助かる。

そうたいした手間ではないけど、離れられるのは監視の上で厄介だし。

「とりあえず、他のものを先に聞いていく。二人は相手を説得する方法でも考えておけ」

その後はダブリもなく、というかダブるとどちらかが辞退か別の係へ立候補してトントン拍子に決まっていって、結果はこうなった。

クラス長

未定

保険委員

荻矢 成幸、沢野 由理香

風紀委員

五月女 悠一郎

図書委員 明嵐 高洋
環境委員 南保 美裕
監査委員 吉倉 愛海
体育祭実行役員 水流 セリナ、長谷 茂晴
文化祭実行役員 上林 あゆ、北条 麻理恵
クラス長 未定の所が心なしか輝いている気がしてくるね。
香織さんはさつき言ってた通り、保険委員に立候補したけどすぐに
辞退していた。

それと、明嵐さん。こつちが勝手に想像しただけなんだけど、それでも図書委員に立候補したときに「なんでだよ！」と思ってしまうたことくらいは許してほしい。

さて、それでは問題のクラス長。
なんとなく面倒な予感がするけれど……

「さて、残るはクラス長だが……天城、伊樹島、二人とも辞退はしないということでもいいんだな？であれば二人で決着をつける方法を決めてもらうが」

「辞退するつもりはありません。成れなかったとしても、自分から引き下がりたいくはありませんから」

「私も辞退する気はありません。そしてこの場で議論するつもりも」

「ほう？」

「私はクラス長を賭けた決闘を天城君に提案します」

この言葉に対してはクラスが少しざわついた。

聞こえたいくつかのセリフとしては「勝負になるのか？」や「クラス長になりたいなら受けるメリットがない」といったものがほとんどだった。

クラスメイトからすれば伊樹島さんと天城護衛対象快人の戦いはネームバリューから伊樹島さん有利といったところになってしまいうけ、実際のところ天城護衛対象快人は丙種の専用機を使うだろうし伊樹島さんもパーソナル・カスタム・データは持つてるだろうから結構いい戦いはすると思う。ついでにどちらが勝とうが僕としてはどうでもいい。

気になるのは固有術式の詳細や自身の霊機が丙種だということについて口を滑らせ、明確な証拠を作らないか。これだけしかない。今後の校内予選もだけど、これが漏れるとせつかく今の所『信憑性の高い噂』でとどめてることが早々に無駄になってしまう。こっちとしては慎重な連中だけでも大人しくしてもらって、まずは過激な連中を相手しながら体制を整えたい感じなのにそれでは慎重派も大きく動き始めかねない。

そのうちバレることではあっても、せめてウチの新人教育が終わる7月までは色んなところには裏取りさせて大規模なことはしにくい状態にしておきたい。って長官も言ってたし。

まあ、そんなこっちの事情は対象も含め何処も知ったことではないから、せめて対象が機密指定の意味を考えて口を滑らせず証拠を作らないことを今は祈ろう。

「だそうだが。天城、お前としてはどうする？別に断つても構わんぞ？私が言い出したこととはいえ、元々こうなった場合はスピーチの上クラスメイトによる投票にするはずだったのだからな」

「大丈夫です。その決闘、受けて立ちます！」

対象のその宣言で、クラスがオオ！と盛り上がった。

もつともさっきのような「伊樹島家の人間相手に・・・」のようなセリフもやっぱり多少あったけど、それはまあ愛嬌つてところかな。

「ただ、伊樹島さんに一つ質問があるんだけどいいかな？」

「なにかしら？」

「個人的なものなんだけど、なんでクラス長に立候補したのか？っていうのがちよつと気になってき。できれば教えて欲しい」

「別に深い意味はないわよ。ただ、将来的に経験しといた方が私にとつてプラスだと思うから。それだけよ。そういう貴方は？」

「俺もそう変わらないけど、しいて言うなら抱負も兼ねてる」

「抱負？」

伊樹島さんがオウム返ししているけど、確かにクラス長の立候補が抱負っていうのはちよつとかみ合わない。クラス長に決定して今後

の抱負とかなら理解できるけど・・・？

「ちよつと自分語りになつてしまふんだが、俺は1月終わりぐらいまで実はここじゃない学校を進路目標にしててさ。ぶっちゃけ本格的に魔導師を目指すつもりなんてあの時はなかった。まあ、その後色々あつてここに入学している訳だけどそこはまつ、どうでもいいな」
そこで一回言葉を切る対象。

色々は固有術式の発現だけれど、やっぱり話の筋が見えないなあ。

「で、入学してみたら主席があゝの伊樹島の人。正直凄いなと思った時に伊樹島さん本人じゃなくて、伊樹島という名字に対して感じたところもあつたよ。けど、やっぱり俺たちは同じ新入生だし多少の差はあつても埋められないほどじゃないと思うんだ。なのに、さっきも少し聞こえたけどさ。伊樹島の人に敵うわけがないってみんな伊樹島さんを上に見てどこか敬遠している。だから、俺の中でのこの学校での抱負はとりあえず伊樹島さん。君に勝つことにしてたんだ。勝手に目標にされて伊樹島さんにとっては迷惑だろうけど、こうも早く伊樹島さんと競えあえて俺は結構うれしいしクラス長のことなんて二の次になつてる。正直、決闘も伊樹島さんが言わなかったら俺が言つてたよ。こんなところだけどうかな」

「・・・一つ聞かせてくれる？どうして私を超えることを目標にしたの？最初はあの伊樹島を超えたつて自己顕示したいのかと思つたけど、聞く感じ違うみたいだし」

対象に対し聞き返す伊樹島さんだけど、その顔は疑問じゃなくて「まさかね」という自分のいきついた対象が自分を目標にした理由が信じられないという感じだ。

伊樹島さんが思つた理由が何なのかは知らないけど、対象の性格とセリフの流れを見る限り多分大抵の人は「大きなお世話だ」って言いそうなことなんだよね。これ・・・

「すまん。ちよつと回りくどかった。よく妹からも『もつと簡潔に』って言われるんだけどどうも・・・。要は伊樹島さんに勝つことで、伊樹島さんも同じ新入生でそんな雲の上の存在じゃないってみんなに知ってもらつて伊樹島さんに対して声をかけやすくしたいん

だ。昨日、今日と伊樹島さん、誰とも話をしてないみたいだったし」
うん。やっぱり。

確かに伊樹島さんは誰とも話してなかったし、クラスメイトもどこか遠慮して話しかけに行つてなかったけど。

でもそれならお前が最初に話しかけるよつて話なんだよなあ。

・・・ん？あれ？けど、今の状況つて半ば対象の目的達成してくない？

「まさかとは思つたけれど、やっぱりそうなの・・・。まず、一つ忠告よ。今までの発言貴方に悪気は一切ないのだろうけど、聞きようによつては私に対する侮辱にも聞こえるから注意した方がいいわ。ただ、私としてもこの浮いた感じはあまりいいものじゃなかったし、その気持ちはありがたく受け取つておくわ。だからといつて私もプライドがあるからそんな簡単に負けるつもりもないけどね」

あら。まさかのこれが好感触？

やっぱり顔とカリスマなのか？そうなのか？

・・・いや、単純に需要と供給が合っただけだね。まあ、それでも十分凄いいけど。

「こつちだつて負けるつもりはないぞ。今言つたことも嘘じゃないけど、俺も男だ。見栄を張れるなら張りたいつて気持ちもあるしな！」

んー、これが青春つてやつ？端から見るとなんか小つ恥ずかしいなあ。

「あー、天城？伊樹島？盛り上がつてるところ悪いが、そういうのは決闘の後でもやつてくれ」

と、途中から何やら端末を操作していた荒木先生が、どうやらひと段落着いたらしく操作をやめて二人の会話に割つて入つた。

「決闘に関しては、ひとまず両者同意ということでもいいんだよな？」

「はい！」

「よし。では、決闘の日時についてだが来週の月曜日の放課後に最初のクラス長の集まりがある。なので、明後日の私の授業。本来は軽いガイダンスにしようと思つたが、そこでいいか？・・・と言つても

これに関しては異論は認められないが」

なら、普通に断言で良くない？

「大丈夫です」

「問題ありません」

「ではこれで決定とする。一応聞くが、何かこれに関してか他の係について何か異議のある者は？」

当然、当事者でもないのに異論が上がるはずもなく、これで決定という流れとなった。

「これで今日の課業は終了だが、午後の部活動説明会も出ることを勧める。それと、ガイドンスでは流したが霊機の貸し出しやシミュレーター、実技場の利用に関してはこの後生徒証アプリで流すので、それをまずは参照して分からなければ窓口で聞くように。では、号令！」

荒木先生はそう締めくくって号令を促すけど、一体誰が号令をかけるの？みたいな感じでクラスがソワソワしている。

そんな生徒の様子を見て、荒木先生も「しまった」という顔をした。「あー、すまん。号令はクラス長がかかるんだがそうだな・・・各授業などの始礼は伊樹島、終礼は天城がとりあえずかける。今回は天城だな」

それに対象がうなずいたのを見て「では改めて」と荒木先生は指示をやり直した。

「号令ー」

「起立ー礼ー」

ありがとうございます！の声が重なり一例をした後、みんな思い思いにばらけていく。

僕も風師さんと香織さんは部活をするのかなと思いつつ、風師さんの隣に向かって行った。